
論 説

アリストテレスの 取財術について (2)

高 橋 広 次

はじめに

- 第 1 章 家と国における財の意義
 - 第 1 節 構成部分と必要条件
 - 第 2 節 家政術と取財術
- 第 2 章 アリストテレスの交換的取財術
 - 第 1 節 交換的取財術の諸形態 (以上, 38 卷 1 号)
 - 第 2 節 交換諸形態の変化の意義 (以上, 本号)
 - 第 3 節 貨幣のスコラ学的意味づけ
- 第 3 章 中世に継受されたアリストテレス的経済観——トマスの商業観
 - 第 1 節 公正価格論
 - 第 2 節 利子論
- 第 4 章 財の使用
 - おわりに 自給自足と貨幣経済

第 2 章 [承前]

第 2 節 交換諸形態の変化の意義

1. 問題提起

オーストリアの自然法論者ヨハネス・メスナーによれば、人間の本性は、文化的存在となり、完全な人格者となることにあり、そのためには「交わり」

と「協働」が必要であると言う。人間は刻印された実存諸目的の点で平等であるが、個別的な本性から見れば、その資質や能力は異なっているため不平等である。こうした本性固有の目的の平等性と個別的本性の諸力の不平等性とのおかげで、人びとはその持てる能力を差し出し、交わりと協働の中で補完し合いながら、共同の目的に結ばれた完全な実存に至ろうとする。メスナーは、民族学や文化人類学が、文化の最も奥深い本質をこうした生活形式のうちに見ていることでも確認できると言う¹⁾。

「交わり」といってもさまざまな形態があるが、信仰は超自然的な愛の交わりであり、家族は自然本性的愛の交わりである。また社会における市民的交わりにおいては、法的権威を背景とする交わりもあれば、売買や貸借といった自由な経済的交換行為もある。しかし一般に言って、交わりは、互いが不完全であるために互いに助け合うべく結びつく人間の社会的本性に基づくもので、人間を共同の究極目的に向けて秩序づけるものであるという点は、万人の納得できる認識であろう。各人はその固有の目的を遂げるために他人の援助を必要としている。

社会生活は、人間独自の世界を、世代を超えて発展させる可能性を秘める。ここでは集合的経験や認識の伝承が伴う。その基本となるのが概念形成と言語の使用であるが、このことは人間本性が創造的であることを示している。新たな価値の現実化と習得が行われる。動物のいわゆる社会生活は、その素質によって協働が全く特定化され組織化されている。これに対して、人間の社会生活は、新しい価値を創造し維持発展させるうえで、交わりと協働が不可欠の条件である。ただしこの交わりは、本能に従ってではなく自由の内に行われるため、「それ以外の仕方でもありうる」流動性を持つがゆえに、円滑ならしめるために拘束的な秩序の制定を求める。

こうして原始的生活を脱して文化的存在であるためには、交わりと協働、集合的経験の伝承、自由な価値創造、秩序の創設が不可欠な要件であることが知られる。この関係を踏まえれば、文化生活を支える中でもとりわけ重要な形態が、法の制定と貨幣の使用であろう。それゆえに法と貨幣を理解しよ

うとするとき、言語の使用と並んで、三者の間に何か構造上のアナロジーが成立するようにも思われ、また実際そうした議論が行われているのも不思議ではない。それらは究極的には人間の社会的本性に帰一するからと考えられる。「社会的本性とは何か」、この根本的問いを心に留めながら、アリストテレスが解明し、後世にも大きな影響を与えた交換と貨幣の経済思想を、今度は後世の研究者たちがどのように受け止め評価したか、その議論成果を手がかりに、改めて論じてみよう。それというのも、アリストテレス自身の交換と貨幣に関する議論は要所を押さえてはいるものの、記述が短く、後の経済事情ならびに経済思想の変化も考慮に入れる必要があるからである。

まず、アリストテレス自身の交換と貨幣に関する記述を集約し、問題提起の発端とする。『ニコマコス倫理学』では以下のような記述がある。

- ・「財貨とはおよそその価値が貨幣によって測られるものの謂いである」(1119b26)。
- ・「交易さるべき事物がすべてなんらかの仕方と比較可能的たることを要するはそこにある。こうした目的のために貨幣は発生したのであって、それは或る意味においての仲介者(メソン)となる。事実、貨幣はあらゆるものを、したがって過超や不足をも計量する」(1133a19-21)。
- ・「かくも著しい差異のあるいろいろのものが通約的となることは本当は不可能なのであるが、需要ということへの関係から充分に可能となる。その際、すなわち何らか単一のものの存在することを要するのであって、このものは協定(ヒュポテシス)に基づく。ノミスマという名称のある所以である。このものがすなわちすべてを通約たらしめる。あらゆるものが貨幣によって計量される」(1133b18-23)(以上、太字強調は筆者による)。

以上の記述から、交換に際し貨幣が異なる財を比較可能にする計量手段として捉えられていること、そして貨幣は「協定(ヒュポテシス)」に基づいて生まれたのでノミスマと呼ばれるということが、われわれに知られる。ノミスマは語源がノモスに由来するが、後者はピュシス「自然」との対立概念である「人為」に属する。両者が古代ギリシア人一般の倫理思考を導く枠組

みを構成していたことはいうまでもない。

次に『政治学』での関連記述を拾い上げよう。

- ・「靴を欲するものに対して、**貨幣**あるいは食糧を引き換えにそれを与える人でもやはり靴を靴として用いる」(1257a10-12)。
- ・「さて**貨幣**が案出されると、やがて必要やむをえざる交換から別種の取財術が生じてきた。すなわち商人的なものがそれである」(1256b41-1257a2)。
- ・「欠けているものを輸入し、余分に持っているものを輸出することによって、相互扶助が今までよりも国と国との間で行われるようになったとき、必然的に**貨幣**の使用が工夫されるに至った」(1257a31-34)。
- ・「或る人びとは富をししば**貨幣**の総量だとみなしている。それは取財術や商人術が**貨幣**に関係しているためなのである。しかし時には以上とは反対に**貨幣**は全く無意味なもの、すなわち人の定めたものであって、自然には何ものでもないと思われる。何故なら使用者がその**貨幣**を廃して他のものを採用したなら、塵芥も同然、生活必要の何ものに対しても少しも役に立たないし、また実際、**貨幣**をたくさん持っていながら必要な食糧にししばこと欠くことになるからである」(1257b8-14)。
- ・「しかるに商人術は財を作るもの、それも凡ゆる仕方によってではなくて、ただ財の交換によってのみ作るものである。そうしてこれは**貨幣**に関係するものだと思われる。何故なら**貨幣**は交換の出発点であり目的点でもあるからである。そしてさらに、この種の取財術から生ずる富には限りがないのである」(1257b20-24)。
- ・「**貨幣**は交換のために作られたものであるが、利子は**貨幣**を一層多くするものである」(1258b4-5)(以上、太字強調は筆者による)。

以上の記述から、交換と**貨幣**に関していくつかの重要なポイントを摘示しうる。まず、**貨幣**は本来が財交換の手段である。そして、国内においてだけでなく外国との交易に用いられるようになると、その使用が便利であるような工夫が凝らされるようになった。ところで、**貨幣**の案出は、それを専らに取り扱う商人階級を独自に生み出した。商人は**貨幣**を単なる仲介とは見ず

に、交換の両端、つまり出発点であり目的点であると考え、その取得に限りなく専念する。貨幣は流通過程から外れ、貯蔵され増殖する。また財交換を抜きにした高利貸しは直接に貨幣の増殖を目指し、利子の追求を専らにするが、これもまた交換のために作られているという貨幣の目的本質(=自然)から逸脱している。けれども、ひとは貨幣を富だと思っているが、ひとの定めたものだからいずれまた廃されることもある。

こうしたことが、『政治学』の記述から要約される。

以上のようなアリストテレスの交換と貨幣に関する思想は、後世に展開された経済思想、とりわけ経済論争の枠組みから見ればどのように評価されるのだろうか。経済はそもそも人間が社会生活を営むに当たって不可欠の基盤をなすが、古代においては、経済活動を担う主体が自由を持たない被支配階級の手へ委ねられ、支配者の有徳な活動のための縁の下のような位置にあったために、それを正面から分析する関心は希薄であったが、近代に入って経済活動を担う商人階級が国政を動かすに及び、生産と流通と消費の循環における商品分析、すなわち資本主義経済の分析が表舞台の主要課題となった。しかし、アリストテレスは、それに先立って、再度振り返られるだけの価値ある経済分析を行っていたのである。そこで、近現代の経済思想家が研究課題として取り組んでいるさまざまな基本問題について、アリストテレスの思想はどのように対応するのだろうか、あるいはもはや対応しえないのだろうか、こうした問題を基軸にして以下論究していくことにしよう。

まず、基本的な問題は、経済における価値と交換の概念である。これに関連して、価値は交換に先立つのか、それとも反対に交換が価値を規定するのであろうかという問題がある。価値には、消費によって心身の欲求が満たされる使用価値と市場で取り引きされる交換価値の区別が知られているが、交換価値については、財の生産に要した投下労働力か(これは生産面からのアプローチである)、それとも欲求の充足という消費面から捉えるべきかとの間で論争がある。これは、マルクスの労働価値説と近代経済学の限界効用説との対立として言い表しうる。ではアリストテレスの経済思想はどちらに与する

のであろうか。

次に貨幣についてさまざまな問題が掲げられている。まず貨幣の「存在」とは何かという根本的な本質論である。いろいろな議論があるが、貨幣商品説、貨幣法制説あるいは貨幣名目説、この両説の対立はよく知られている。これに加えて貨幣象徴説も挙げておこう。これらの本質論は実は**貨幣の素材論**と並行して議論されている。それゆえに、金属説か表券説かの対立としても現れる。アリストテレスの言葉を借りるなら、貨幣の形相－質料論である。貨幣の本質を形相面に求めるなら、それは素材の重要性を度外視して、交換ないし流通の一般性や抽象性の程度が高まれば高まるほど、その本質を実現するものとなる。電子マネーはその最たるものであろうが、貨幣は基本的には国家の法制に拠って通用力を保障される。これに対して、貨幣の本質を質料面に求めるなら、貨幣はそれ自体が素材価値を持たねばならないので、価値ある素材、すなわち貴金属にあるとされる。紙幣は貨幣の使用を節約する代用物でしかなく、究極的に社会の必要とする金の量を代表しているのである。本物と代理とは区別されねばならない。

さらに貨幣の本質論に絡まる論議は**貨幣の機能論**である。機能は、アリストテレスの言葉で言えば、実体概念（微妙であるが、あるいは本質概念）に対する関係概念に相応する含みを持つ。貨幣の重要な機能については、学者によってさまざまな分類が行われているが、ほぼ以下の四つにまとめられるであろう²⁾。

- ① **価値尺度手段** ある商品は格別によく用いられか、多くの人びとの欲求の対象になっていると、その他の諸商品はそれを的に交換されるケースが増え、やがて後者の諸価値は、前者の単一の価値で統一的に表現されるに至る。この商品はあらゆる他の商品を束ねる扇の要の役割を担う。有名なバビロニアの会計原則は「銀一単位が大麥一単位に等しい」とした。今日では金一般的な等価形態に固定される。なぜなら、金は価値の一般的尺度として、耐久性や均等性や可分性といった条件を具えているからである。こうして商品は金の重量を基に計量可能な貨幣

によって価格表示される。貨幣はそれ自体が一つの商品として価値を持っていることから、価値尺度として他の価値を測定しうるので、価値尺度たることが貨幣の本質機能をなすことになる。

- ② **交換手段** 財の売買や貸借において流通の仲立ちをする交換手段として機能する。あるいは商品の形態変換を行う手段とも言える。物々交換では、相手方の商品に対する欲求の二重の合致が成立の前提条件とされたが、そのような合致はなかなか起こり難い。こうした不便を克服するために、商品の売却と購入の過程を分離し、商品に等価とされる貨幣を媒介させる。たとえば販売とは、商品がその使用価値の形態を脱ぎ捨てて貨幣の姿に転化することである。購入とは、貨幣が有用な商品に転化することである。商品の売却と購入との間にはタイムラグが生じる。
- ③ **価値貯蔵手段** C—M—C'と流れるはずの商品流通がC—Mの段階で中断し、貨幣が流通手段であることを否定して、個人的な貯蓄や資本蓄積や減価償却基金のためにストックされる場合がこれに当たる。資本主義では、蓄蔵貨幣は「銀行という貯水池」に集められる遊休貨幣である。もっとも、金融資本主義の段階に至れば、現物を動かすことなく知能上の操作で貨幣を蓄蔵することができる。ただ所有しているだけで所有者に意志の自由度を高め、社会的威信を増すのが貨幣である。しかし吝嗇のために使用されなければ、退蔵であり、死蔵にもなる。
- ④ **支払い手段** かつて支払いは、責務の違反に対して行われたが、その方法は、支払う者の生命・身体の破壊だけでなく、自由の拘束や身分・名誉の失墜をもってなされた。しかし、責務を負う者が決済に用いた単位がたまたま物理的存在であった場合に、代償として貨幣による支払いが可能となる。また納税の責務に関しては、封建時代に領主に対する物納や労務の提供が行われたが、後に貨幣経済が発展するに伴い、金納に取って代わられた。現代では、信用経済が主軸を占めており、当事者間で生じた債権債務の相殺により特定時期に一括してその差額のみを貨幣で支払えばよく、支払い手段の節約が常習となっている（しかし、

支払いが滞れば信用が失われ、すべて現金支払いとなるが)。何の授受の手続きも要せず、帳簿上の貸借をもって取引を進める振替勘定にあっては、貨幣の理想的性格はより純粋に現れることになる。

経済学者の間で今日事典的に集約、区分されている貨幣の機能は、ほぼ以上のようなものであろう。ところで、これらの機能の中で、どれが最も貨幣の本質に近いかについては、諸説紛々である。現代では、文化人類学のもたらした発見に経済学が啓発を受け、貨幣そのものではなく、「貨幣という概念」こそ重要であるとの認識も示された。ではアリストテレスは、今挙げた貨幣の機能の内、どれに最も重きを置いているのであろうか、これが問題となる。

まとめれば、これから論究の対象となるテーマは、価値と交換、貨幣の本質・素材・機能論について、後世の経済思想を参観しながら、アリストテレスのとりわけ貨幣思想を位置づけることである。その際、アリストテレス哲学の基本的な思考枠組み、たとえば、カテゴリー論や形而上学で中心をなす実体と附帯性、形相と質料、個物と普遍、デュナミスとエネルゲイア、倫理学や政治学で中心となるピュシスとノモス、「善き生」の目的と手段、こういった枠組みをもって貨幣の本質を捉えて取めることができるかどうかを考察される。なぜなら、後世の経済思想家も、アリストテレスのこうした概念を用いて議論しているものの、経済思想の著しい変遷に伴い、正確に見ればその用い方にずれが見られるからである。

2. 貨幣の哲学的基礎づけ——ジンメル『貨幣の哲学』に即して

(1) 価値と交換

貨幣をめぐるさまざまな問題について、これまたさまざまなアプローチがある。経済学は固より、心理学、社会学、文化人類学等の目覚ましい業績がある。しかし、これらの業績を踏まえつつも哲学的な掘り下げにおいて際立っている著作は、ゲオルク・ジンメル『貨幣の哲学』（第1版が1900年、第2版が1907年）ではないかと考える³⁾。この著作は、そもそも「価値」とは何

かという哲学的な分析から経済的価値の問題に入り、ここで交換という概念を引き入れている。ジンメルといえば、「相互作用」という概念を新基軸として人間社会の本質を捉える精神科学一般の方法論にまで精練したことで知られているが、「交換」とはまさにこの「相互作用」を置き換えた言葉にほかならない。言語、宗教、道徳、法等の精神現象は、個人の発明によるのでもなければ、超越的な力によるのでもなく、同一世代内の社会的相互作用の産物を次世代の継起により伝承するという歴史的相互作用の二重の働きにおいて定着したものだと思われる。貨幣の考察はまさにこうしたアプローチがふさわしい。しかし、ジンメルの本著は『貨幣の哲学』と銘打っているように、貨幣の生成過程を歴史実証的に探ることに関心があるのではなく、あくまでも人間の精神構造の分析から貨幣の本質を探ることに狙いを定めているところに特徴がある。この方法論の違いを認識することが大切である。われわれは、まずジンメルを分析を手がかりに、アリストテレスの経済思想と比較してみよう。

アリストテレスにおいて、「交換」という言葉が『ニコマコス倫理学』第5巻で、正義論の観点から、交換的正という第3番目の「正」を論じる中で、重要な意味を与えられていることを既にわれわれは知っている。ところで、それに先立ち「価値」という概念を彼はどのように捉えていたかを検討しなければならない。それに対応する言葉は、 $\alpha\sigma\iota\alpha$ ⁴⁾である。この単語は、『政治学』においても、 $\kappa\alpha\tau' \alpha\sigma\iota\alpha\nu$ すなわち「価値相応に」という連語の中でよく用いられている。それは自分の行為や他人との交わりにおける「ほどよさ」を意味する。事柄の値するところに応じ、ことわりの命じるであろう仕方で情感し、行為し、相手と交わるような価値相応の振る舞いが、ロゴスを具えた有徳者について評価される言葉であるが、他方、配分的正の意味で、功績に応じて配分される分け前が「正しい」各人の「分」であるとの意味でも用いられている。これに対し、恋愛といった相互作用に見られるように、必ずしも財貨によって測りえない価値があるが、その価値が貨幣によって測られるものがある。これが財貨 $\chi\rho\acute{\eta}\mu\alpha\tau\alpha$ である。

アリストテレスによる「価値」の説明はこれ以上あまり見られないので、経済に関わる重要な言葉でもあるだけにもう一步立ち入った記述がほしいところであるが、これに比べれば、ジンメルは哲学的分析を施したのみならず、そこから経済概念に結びつけているうえで興味深い。ジンメルによれば、われわれが欲する事物が入手し難くそれを享楽できない「抵抗」（外界の实在を「抵抗」と呼んだディルタイを思わせる言葉）を示せば示すだけ、われわれはますますそれを欲する。こうした事態が主体と客体の分離を惹き起こす。われわれの所持しているものが失われた場合、あるいは自分の思うままにならなくなったときに、かえってその価値が切実に評価されることはよくあることである。この分離において「距離」Distanz が生まれるが、主体が何らかの客体を享楽しうるためには、その距離を克服することが肝要となる。この客体に接近するうえでの妨害や困難を排することが「欲求」Begehren である。これに伴い、この客体は主体からの「隔たり」Abstand によって「価値」を有することになる。しかしながら、価値は客体自体の有する性質ではなく、主体内部での客体に関わる評価であるから、客体は、価値があるからそれを獲得するのが困難になるのではなく、それを獲得しようとする主体の欲求を妨害するがゆえに価値があるのである。主体が欲求する客体に到達するには、その抵抗が大きいほど、「忍耐・失望・労働・不便・断念などの犠牲」を余儀なくされる。主客未分の状態で主体が客体を直接享楽している段階では、距離はなく、また犠牲を要しない。「犠牲」Opfer は、価値概念一般を説明するジンメルにとって重要な概念である。「犠牲は個々の価値の条件であるばかりでなく、経済的なものの内部においては……価値一般の条件である」と強調される所以である⁵⁾。

ところで主体と客体との間の距離は上下に二つの限界を持つことが指摘される。客体との距離があまりにも大きければ、到達不可能なので価値を生じないし、逆に小さすぎれば、たとえば水や空気のように容易に手に入るものならば、これまた価値を生じない（もっとも、今日的环境経済学では、公共財となったが）。「希少性と非希少性との間にある一定の中間のもの」が、とりわけ「経

済的価値の条件」をなしていると言える。経済的価値が生じるためには、主客両者間に距離がありながらかつそれを克服する「接近」Annäherungが計られねばならない⁶⁾。距離と接近は時代相関的であり、原始人と現代人とでは異なる。原始人では思いもつかない距離にある存在や出来事が、現代人にとっては死活の意義を持つようになった。文化が進歩すればするほど、主体と客体との距離は大きくなる反面、主体の客体に対する接近の欲求も強まる。

さて人間が欲求するのは何も自然界のもたらす財であるだけではなく、むしろ向上した文明段階では、欲求の対象たる「客体」は、大体が他の所有者の持つ財である。このところに、交換という相互作用が登場してくる所以がある。他者の所有物が欲求の対象となることを、一般に所有変更と呼びうるが、前交換的な段階では、所有変更は掠奪や贈与によって行われた。両者を同一視することに懸念が残るが、いずれも一方的な所有変更であるとは言えよう。掠奪や贈与は主観的・恣意的であるがゆえに、とりわけ前者は被害者の所有状態にとって危険な所為であるだけに、こうした範囲から脱出することが切望される。また後者の場合でも、贈与によって、受贈者は無形の支配下に置かれ、暗黙の裡に自由が拘束されたと推定するに難くない。こうした恣意的状態から逃れるために、人間は超主観的・客観的な所有変更の場を設定するに至った。これが「交換」である⁷⁾。

ジンメルからすれば、人間相互の関係の多くは交換と見なされる。思うに、交換とは実に人間の間たる本性、つまり理性的本性を際立たせる行為である。動物は交換を知らない。交換を行うためには、相手と共通する場を設定しなければならないが、そのためには自分を客体化できなければならない。かくして個人を超えた超主観的な領域が設けられ、ここを支配するルールにはいずれも服従することが求められる。交換によって双方は、自分のものであったものを手放すが、それは自分から切り離されたものであり自分自身ではない。この犠牲にされたものは客観的に等価でなければならない。しかし、この客観的な価値量を全く変えることなく、主観的には犠牲にしたも

のよりも多くの価値量を享受できるのである。こうした手段により、ひとは個人的人格を失うことなく、否いつその自由を獲得できることになる。こうした犠牲的交換は「所有変更を公平に結びつける最高の手段であり、その単純さにおいて実に驚くべき手段」であり、ジンメルはここから、「人間は交換する動物である」と呼んだ⁸⁾。この規定は、アリストテレスが人間を動物から際立たせる本質的差異を求めて、「人間はポリスの動物である」とか「人間は言語を用いる動物である」とした定義に付け加えられるものであるとともに、国あるいは法、言語と並んで貨幣もまた、人間の本性の延長上に成立することを推測せしめる。

ところで交換過程への貨幣の介入に論及する前に、われわれが交換と価値の関係について提起しておいた問題の検討に入っておく。交換と価値との関係は、交換によって価値という媒体が形成されるのか、それとも媒体によって交換が生じるのか、交換と価値媒体の先後関係に関する問題である。この論点は、経済学史上、絶えず繰り返されている主観的価値か客観的価値か、価値を方法論的個人主義に基づかせるか、社会的なものに拠らせるかに通じる。

- ① たとえば、マルクスの労働価値説は、労働力の商品化を根拠に資本の価値形成を明らかにしようとするものである。しかし、仮に労働力がさまざまな生産物を作り出したとしても、交換の需要がなければ、その労働力は価値を持たないだろうし、その労働力が、ある成果を生み出すに当たって捧げられた犠牲として感じられていなければ、価値あるものとは見られない。労働力もまた交換の可能性と現実性によってはじめて価値の範疇の中に入ってくる。
- ② あるいは、自然経済を基盤とする中世の学説は、価値を何か客観的なものと見て、売主はその商品に対し、正当な価値を要求すべきであると考え、公正価格論を展開した。この考え方によれば、売主と買主との関係を超越して、価値は物自身の属性として物に具わるものであり、物はそのような属性をもって交換作用に参加する。物は一定の強さを持った

価値感情と直接に結合しており、交換において物の価値は客観的にあい対応するかのような観を呈した。しかし、切迫した状況では、パンを得るために宝石を手放すことがあろう。価値は出来上がっているものではなく、欲求された客体にその代わりに必要な犠牲によってもたらされる。希少価値は物にあるのではなく、かえって交換において希少性が評価されるのである。

ジンメルによれば、「Aが経済的価値となるのはようやく、私がおの代りにBを与えなくてはならないことによってであり、Bが経済的価値となるのもやっと、私がAをその代わりに受け取ることができるときである」⁹⁾。欲求が二重に一致した交換こそが経済的価値を生み出すのであり、既に客体に投下された労働力コストに見合うと評価される価値からではない。価値は実体の属性ではなく、関係の所産である。価値が生じてくるのは困難を克服するために払う犠牲によってである。欲求の激しさが価値を高める。つまり、ジンメルの考えでは、客体にあらかじめ高い価値が具わっていて、それを克服することが多大の犠牲を要することになるというのではなく、客体への強い欲求を隔てる抵抗が、主体の獲得努力を妨げるがゆえに、価値を生じるのである。

(2) 貨幣の発生的考察と本質的考察

さて、歴史的起源から見ると、貨幣は既に存在した何らかの価値を実体的支持者として、それと結合しつつ発生する。原始的経済段階にあつては、価値あるものとして直接に感覚される家畜・塩・奴隷・煙草・毛皮のようなものが、どこでも貨幣として現れ、いっそう感覚的共通性を希薄にして、雄牛・魚・斧などの形象を刻した貨幣が用いられた¹⁰⁾。経済思想が原始的であればあるほど、価値の測定は、比較される価値と価値との間に、感覚的に直接的な関係が存在することを要求する。二個の大きさの間の量的関係を直接の比較によって定立しないで、各々がそれぞれ第三の大きさに対して有する二個の関係が相等しいとか、相等しくないとかいうふう定立するに至る

のは、人類が成し遂げた最大の進歩の一つであった。われわれの能力は、二つの物のみでなく、二つの物の間の関係を互いに比較し、相等性の判断または相似性の判断の統一の内に把握する。「物」の直観ではなく、「関係」という抽象の直観がそこにある。「数」とは、超越的「或るもの」である。一方の交換客体の分解により双方の交換客体の価値が同一の単位で表現される場合は、両種の交換客体の価値は相互に比較できるものとなる。そしてこの結合は貨幣に対する交換においてその最高の形式に到達する¹¹⁾。

貨幣の本質に関する論争は「貨幣は、価値の測定と交換と表示の機能を果たすため、それ自体価値であらねばならないか」という問題をめぐっている。なるほど「長さの尺度は長くなければならず、重さの尺度は重くなければならない」¹²⁾。そうであれば価値を測るためには、測るもの、すなわち貨幣は価値を持たねばならないということになる。しかしながら、財の相対的価値を表現する貨幣の意義は、その中に存立する実体価値に少しも依存しない。容積の測定のための目盛りは、その部分相互の関係または第三者との関係を表せば足りるのであって、鉄であっても、木であっても、ガラスであっても構わない。それと同じように、価値の測定のために貨幣が示す目盛りも、その実体と関わることはない。このような財の価値の尺度としての観念的意義をそっくり保ったまま、貨幣は中間財、価値保存手段、価値輸送手段として、その性質をさまざまに変えることができる。この変化は、貨幣が直接性と実体性の形式から観念性の形式に、つまり「何らかの代表的な象徴」としての作用を営むに至ることを妨げないことを意味する¹³⁾。

概念の質的内容が確定するに伴い、関心はいよいよその量的関係に向かい、ついには実在の一切の質的規定を純然たる量的規定に分解することが認識の理想であると考えられるに至る。このような量的関係の分離は、事物の象徴的取り扱いを容易にする。知力、抽象能力の発達、貨幣がその自己価値から解放されて純粋な象徴となっていく時代の特徴をなす。「商業領域の内部においてもまた、とりわけ純粋な金融業務が問題となるところでは、疑いもなく知性が主権の地位を占める。知的な抽象化する能力の上昇は、貨幣

がますます純粋な象徴となり、その固有価値と無関係となる時代を特徴づける」¹⁴⁾。

経済価値の全き象徴的な性質は、貨幣の発達が目指す目標ではあるが、しかし到達しえない理想である。もともと、貨幣は他のすべての価値客体とともに同一の系列内に立ち、その具体的な実体価値は他の価値客体と比較秤量されるが、交換手段と価値尺度への要求が増大するにつれて、貨幣は次第にそうした価値比較の一分子たることを止めて、価値方程式の表現となり、その限りにおいて実体価値に依存しなくなる。それは、現実世界を無条件に支配しながらその上に浮遊するプラトンのアイデアに似た価値世界のようにである。しかしながら、ジンメルは「貨幣は実体的価値の残滓をぬぐいさることができ」ず、全くの象徴になり切ってしまうことはできない、「貨幣機能の純粋な記号貨幣への移行、貨幣量を制限するすべての実体価値からの貨幣機能の完全な分離こそは、技術的には実行できない」とも述べていることに注意する必要がある¹⁵⁾。

(3) 交換を保証するもの——貨幣と社会権力

あらゆる社会的な構成は人と人との相互作用を出発点とする。しかし社会生活の発展に伴って、力と力との直接的な相互作用の代わりに、より高い超個人的な諸構成体の創造によって取り替えられるや、これがあの諸力の担い手として現れつつ、個人相互間の関係を嚮導しかつ媒介する。社会がまず絶対的統一として存在し、次に構成員間のあらゆる関係が、かの統一の内部に発生するのではなく、「むしろ社会はこれらの特殊な相互関係の全体の総括、もしくは一般的な名称にほかならない」¹⁶⁾。このとき行われる交換こそ、社会化であり、その存続が諸個人の総計を社会的な集団に至らしめる関係である。集団が拡大し複雑となるにつれ、一方ではこれらの機能のために特別の分業的機関が成立し、他方では結合的理想および象徴が創造される。交換の機能は、事実上二つの種類の形成となる。すなわち商人の身分と貨幣である。商人が交換主体の間に介在するように、貨幣は交換客体の間に介在

する。交換客体の等価性が直接に有効となり、交換客体のそれぞれがそれだけで貨幣との同等関係に立つことになる。「商人が交換の具体化された機能であるように、貨幣は交換されることの具体化された機能である」¹⁷⁾。

こうした交換が二人の間の単なる私的事件でなくなるのは、一方の個人が与える交換価値が、他方の個人にとっては直接には意義を持たず、他の決定的な価値物への支払いの指図としてのみ意義を持ち、かつこの指図の実行が経済圏の総体もしくはその最高の代表者としての政府の力を俟って行われるということによる。貨幣による取引が自然交換に代わることは、両当事者の間に第三者としての、社会全体が介入し、貨幣に対してそれに相当する実在価値を確保することを意味する。すべての貨幣は社会に対する支払いの指図にすぎないという見解の中核はこの点にある。「貨幣はいわば、支払人の氏名が記入されていない為替手形、あるいは刻印が引受けの代わりをする為替手形として現れる」¹⁸⁾。貨幣による私人の債務の履行は、今や全体がこの債務を負担することを意味する。

ところで、このような経済的信用一般は超理論的な信仰を含む。今受け取られた貨幣は同じ価値のために再び支出されるという信頼がなければならぬ。それはあたかも、農民は今年も収穫できると信じて種をまき、商人は公衆が自分の商品を欲しがると信じてそれを調達するようなものである。「すなわち公共はわれわれがわれわれの労働の生産物を提供して入手した象徴的な記号にたいし具体的な対価をわれわれにあたえるであろうという信頼も、同じようにこの超理論的な信仰の要素を含んでいる」¹⁹⁾。これは、一方には単なる帰納的推理であるが、他方には宗教的信仰に類似した社会心理的信仰をも含んでいる。貨幣所有が与える個人的な安心という感情は、国家的・社会的組織と秩序に対する信頼の最も集中した形式である。

それでも貨幣を継続的に使用してくれる可能性の保証はない。「貨幣の中にある請求権が満たされないかもしれないという可能性は、貨幣がたんなる信用に基づくという性質を証明する。それというのも、その実現の蓋然性の確率がいかに百パーセントに近づこうとも、けっして百パーセントにはなら

ないということだからである」²⁰⁾。しかしながら、公共団体の組織により貨幣の機能的価値が確保されるにつれて、貨幣制度にとっての金属の意義は次第に後退していき、貨幣は次第に厳密な意義における公的な制度となる。中央集権化された広大な社会圏に対する貨幣の関係が、より密接になるにつれて、貨幣は確実性の価値を帯び、貨幣の機能はいよいよその金属価値に対する独立性を発揮した。

価値のきわめて大きいものと、刻印を付した紙片とを交換するようなことは、目的の系列が延長され、かつそれが信頼すべきものであるがゆえに、直接に無価値なものに代えて他の価値あるものを獲得しうることが確実であるような場合にのみ行われうることである。このことは個人の知力の発達と社会の組織の安定とを前提するものであって、原始的経済状態においては望まれようもなかった。現在の文明社会の状態を見るならば、貨幣はもはや、その素材が、直接に必要不可欠の価値として表象されるがゆえにわれわれにとって価値を有するものとはならない。素材価値が心理的に不問に付せられることで、紙幣やもろもろの形式の信用が金属貨幣の代用をなし、貨幣の用途が広範かつ多様となるとともに、個々の貨幣量の循環速度が加わって、貨幣の機能的価値はその実体価値を圧倒するに至った。

(4) 実体概念から機能概念への貨幣の発達

社会権力の安定化に伴い、貨幣実体に代わって貨幣機能の重要性が増大するが、こうした過程を促進した事情を説明する必要がある。ジンメルによれば、それは「流通の簡素化、価値尺度の不変性、価値の流動化とその流通の促進、できるだけ簡約な形式への価値の圧縮」²¹⁾といった理由に求められる。貨幣の完全な恒常性が実現されるためには、一般に貨幣がそれ自身としては何ものでもなく、具体的な貨物相互間の価値関係の純粋な表現であることが必要である。貨幣とたとえば小切手・手形・倉荷証券・振替のような貨幣代用物との二者は、ともに同一の機能を営みうるものであり、後者は必ずしも前者を圧迫するものではなく、その回転を速めるにすぎない²²⁾。

取引の増加は、貨幣片の縮小化によって応じられる。一般に鑄貨の発展は小型化へと進行するものである。「事物の経済的な意味を独自の言葉において表現するのみではなく、それをそこに圧縮することは、貨幣の機能に属する」²³⁾。ある客体のために支払われる貨幣量の中には、客体の有する多様な利益がことごとく一つの統一体の内に圧縮されて宿っている。貨幣においてのみならず、価値圧縮という工夫に、ジンメルは近代的精神の奥底に通じるものを見出した。それは「どこにおいても最大の力を最小の点に集中し、エネルギーの集中の形式によって、われわれの目的にたいする消極的および積極的抵抗を克服することにある」²⁴⁾。自然力を集中させ労働力を増進させる機械はその最も適切な例である。

ジンメルによれば、価値保存の手段であり、また価値輸送の手段たることは、貨幣の主要な機能であるが、これらの機能は、価値圧縮の手段たる根本的機能に比べれば、二次的な機能にすぎない。この機能は実体に対する貨幣の依存関係と無関係である。貨幣がこの機能を発揮すればするほど、その実体との結合から解放される。なぜなら、「実体はその機械的な不変性と固定性において、実体の観念に投影され実体の中に圧縮された価値物の豊富さと変化と多様性に不適合とならざるをえないからである」²⁵⁾。貨幣の精神化の上昇が進むほど、相互作用の抽象たる貨幣は、一切の空間的、実体的なものにおいて、たんに象徴の役割しか期待しえなくなる。反対に、実体が後退するにつれてはじめて貨幣は現実に貨幣となる。もともと、実体から機能へと向かう貨幣の発達をもって、貨幣一般の価値が低下することを意味するわけではない。「それというのも貨幣が解消される機能そのものが価値をもつからであり、それによって貨幣は価値が成長し、この価値は金属貨幣の場合は付加的なものであり、記号貨幣のばあいには唯一のものである」²⁶⁾。

以上より、機能概念に還元されたジンメルの貨幣観が、ひと目で把握できるようなキーワードを選んで、貨幣の本質がどのように表現されているかひとまずまとめておく。

① 物の価値は、貨幣においてその**最も純粋な表現**に到達する。貨幣にお

いて、最も純粋な相互作用が最も純粋な表現を与えられ、きわめて抽象的なものが直ちに把握されうる。

- ② 可視的な客体としての貨幣は、価値ある客体から抽象された経済的価値が宿っている身体である。貨幣は実体にまで凝縮した妥当であり、物を伴わぬ物の妥当である。
- ③ 貨幣は、一方では交換される財貨の相互的価値関係を測定し、他方では、経済価値の相互連続性を成立せしめるため、自ら他の財貨との交換の内に立ち入る。
- ④ 貨幣は、個性を有する物の間において、あらゆるものに対し内容上一の關係に立つから、それ自らは全く個性なきものである。物の個性的形式は、交換を媒介する貨幣の無個性性に感染して、個性を否定される。

さてジンメルに即して、貨幣形態および機能の歴史の変遷を顧みると、貨幣の本質は、アリストテレスの言葉を用いれば、素材重視の、したがって機能範囲がごく限られるデュナミスから、素材から離脱する方向にますますエネルギーを、すなわち貨幣の機能がいかんなく発揮される本質の顕現を見て取れるようにも受け取れる。ところが、アリストテレス自身「貨幣は貨幣を生まない」という視点から利子の取得を非難したのであるから、交換機能に限定して、それ以外の使用を顧慮に値しないとされた彼の貨幣観は、貨幣の本質が顕現せず、まだまどろんでいた状態にあったことを明瞭に示すものとなる。彼は、既に、貨幣の本質探究に当たって、素材実体が、たとえば金が重要ではないことを見抜いていた。本質はデュナミスの質料よりもエネルギーの形相にある。そうであれば、近代に至って現れた金や銀と結合した貨幣実体を等閑視する信用経済の発達は、もし彼が今生きていれば、肯定されそうであるが、どうであろうか。代用貨幣も、増殖目的でなく、交換の便宜の促進という視点からなら、目的本位の彼の定義に違背することはないかもしれない。アリストテレスにおいては事の本質を洞察しようとするなら、「形相」と並んで「目的」概念が常に重要となることに留意する必要がある。

次に、ジンメルが貨幣を目的-手段の系列においてどのように捉え、それがどのような意義を持ち、効果を生み出すかについて、アリストテレスとの比較を念頭に置きつつ説明しよう。

(5) 目的-手段系列における貨幣

「人間は道具を作る動物である」と言われるが、このことを最も的確に証明し表現するものが貨幣である。それは手段の最も純粋な実在性に到達したものであり、手段そのものである。道具はふつうには物理的なものについて連想されるが、関心が物質的生活に直接向かわず、その精神的条件に向かうとき、道具はかえって純粋な形式を取得する。この場合、道具は全く意志の発明物であり、目的にとって疎遠な素材の特殊性に妥協するには及ばない。その際立った典型は社会制度であり、個人はこれを利用して個人的な能力では到達し難い目的に達しうる。多数の人びとが相互作用に携わるうち、偶然的なものが互いに相殺され、利益の共同性に基づき客観的な諸制度が成立する。それはあたかも無数の個人の「目的曲線 Zweckkurve の集合点」のように、便利な道具としての役目をつとめる。ジンメルが言う「目的曲線」とは、「主体から客体へとむかい、客体を自己に引き入れ、再び主体へと帰ってくる」目的行為の図式である²⁷⁾。

このような道具として、貨幣は目的と目的との交錯の中に立ち入る。お互いが得ようとする客体が一致しない場合や分量について意見の一致を見ない場合、目的連鎖の中に一つの間接項を挿入し、われわれがいつでもそれで客体を取得できるようにするが、このことは目的達成に最大の価値を持つことになる。貨幣は、国家制度や宗教制度とは違って、何らかの特殊な目的とは内容的にいかなる関係も持たず、交換という契機によって客体から分離しているから、客体に対して全く無差別に結びつきうる。貨幣は「目的系列にたいしては完全に無差別な通過点として現れるからである」²⁸⁾。

ところでジンメルは、「目的が手段の思考をつくったのち、手段がまた目的の思考をつくる」²⁹⁾と言う。この意味は、手段は、目的が実現してしまえ

ば、その用途は終了し、手段としての力と意義を失ってしまうが、道具の本質は、個々の利用を超越して存続すること、または前もってはけって確定できない多数の任務につかされることに存するということである。ある道具がより多くの目的に役立つればうるほど、その意義や価値はより大きくなる一方、個々の目的に対して、無差別、無色となつて、あらゆる特殊な目的内容との連結から隔たるようになる。貨幣の価値が、それによって交換されるべき特定の客体の価値を凌駕するのは、それが、この客体の代わりに、はるかに大きな範囲の中から任意に客体を選ぶ機会を与えるからである。

こうしたメリットを有するゆえ、目的系列において貨幣の地位の転換が起こる。つまり、手段の心理的な目的化が生じるとジンメルは指摘した。一般に、目的の定立は自発的な意志の作用に基づくが、それを実現する手段の相対的価値は、理論的認識に基づいてのみ認められる。「目標の設定は、性格、気分、利害関心から生じる。しかしわれわれに道を指令するのは事物の性質である」³⁰⁾。なるほど、究極目的の設定に自由意志が現れるが、実は、手段の理性的選択こそが心理上その目的価値に参与しつつ、われわれの意識に対し、決定的な価値の性質を帯びさせるのである。

目的は最も明瞭に目的として意識される場合に、最も善く到達されうるとは限らない。一度発生した目的表象は、記憶の力によって、その実在的基礎が消失した後にも残存し、意識の内に存続しうるが、究極目的がいつまでも意識の内に生き残れば、一定量の力が消耗され、手段の創出がそれだけ妨げられることになりかねない。したがって、最も合目的的な方法は、目的系列中のすぐ次に実現されるべき段階に向かってエネルギーを集中することである。もし、われわれの意識が常に最初の目的定立に固執し、絶えずこれを意識していなければならないなら、多様な手段の構築のための十分な自由は持てなくなり、いつまでたっても原始的な目的定立しかできないし、目前の仕事の持つ意義を過小評価するならば、その課題に向かって集中的に力を注ぐことができなくなる。「それゆえ実践的に最も合目的なことは、究極目的への手段をあたかもそれが究極目的そのものであるかのように取り扱うことで

ある」³¹⁾。

究極目的の価値転換を最も広い範囲においてかつ最も根本的に行うものが貨幣である。貨幣の価値の絶対化は、貨幣がより純粋な手段的価値を帯びる程度に応じていっそう完全に行われる。貨幣がより純粋な手段となることは、貨幣によって獲得される対象の範囲が拡大し、物がいっそう無抵抗に貨幣の威力に屈服することを意味するとともに、貨幣そのものがますます無性質的なものになることを意味する。「手段としての貨幣の価値」が高まるにつれ、「手段としての価値」も高まり、ついには価値自体として妥当し、目的意識が決定的に貨幣において停止するようになる。絶対的手段たるとともに、絶対的目的となるという貨幣の本質が、貨幣を實際生活の有力な指導者に押し上げるのである³²⁾。

価値意識が貨幣を絶対化する範囲は、経済的関心が原始的生産から工業的生産へと展開するにつれて増大する。ジンメルはここで、古代のギリシア人と近代人とが貨幣に対してとる態度の相違を取り上げ、前者を代表するアリストテレスの主張を引き合いに出し、彼にあっては貨幣が消費のために役立ったのに反し、後者にあっては生産のために役立っていると指摘した。古代ギリシアにおいては、一般に経済的関心は生産よりも消費に向けられた。生産は主として農業的であり、その単純な伝統的技術は、進歩してやまない工業におけるような経済的意識の緊張を必要とせず、消費の方面に経済的意識を向かわせた。また労働も、日常相次いで起こる消費のためにするもので、さらなる獲得を刺激して促す所有のために行うものではなかった³³⁾。

アリストテレスが考えたように、積極的に道徳性を展開せしめる所以は財の使用であって、財の製作にはない。消費の価値のみが重んじられる所では、貨幣の空虚な性質ばかりが目立ち、経済の究極目的に直接対立するよう受け止められた。このような消費に向かう関心の偏重は、農業的生産の優越から生じるものであり、法律によって確実に保証される土地所有こそ、ギリシア人の生活感情の持続と統一とを保障しうる唯一のものであった。それはギリシア哲学全体を特質づける実体概念への固執につながっている。近代的

統一が、流動的貨幣が種々様々な等価物に結びついて己の本質を表現するところに実現されるのに対し、古代ギリシア的統一は、不動の実体に依存する土地所有にこそ生存の連続性を可能にする静態的なものを見出したとして比べられる³⁴⁾。アリストテレスに関するジンメルの記述はわずかであるが、その経済観の本旨を的確に捉えているように思う。財の使用と所有の問題は、家政術、言い換えれば経済活動の秩序づけに関連して後にまとめて論議しよう。

引き続きジンメルは、貨幣を基礎とする商業は将来に対する信頼をもって経営されるが、このことが、ギリシア人に商業に対して好感を抱かせなかった理由であると述べた。なぜなら「ギリシア人にとっては将来は原理的に何か計算不可能なもの、将来への希望は人を欺くもの、さらには神の怒りを挑発するかもしれない不敬事とも思われた」³⁵⁾からである。貨幣への欲求が高まり普及するのは、宗教的絶対者への昂揚や満足が力を喪失した時代である。最終的な生活目的が委縮した瞬間に、専ら手段でしかなかった価値が、それに代わってその形式を身にまとうということは、歴史の発展の皮肉である。神の思想が深い本質を持つのは、世界のすべての多様性と対立が神において統一に達することにある。こうした観念から、「われわれが神と共にある」という表象に伴う感情の限り無い豊かさが生じる。

ところが、貨幣が引き出す感覚も心理上それに類似した点を持っている。なぜなら貨幣が次第に、あらゆる価値の絶対的な表現と等価物になることによって、貨幣はさまざまな客体を越えた絶対的な高みへ上昇し、きわめてかけ離れ、対立し合い、疎遠であるこれら客体がことごとく会合する共通の中心点になる。かくして貨幣は事実上、神の表象に似た作用を営むようになる。宗教教団が、しばしば貨幣を敵視し忌避する方途をとるのも、このような「経済的最高統一と宇宙的最高統一との間に存する心理的な形式類似性」が、本能的に感知されるため、そこに生じる競合が宗教的生活を圧迫する危険感情に基づくのではないかと推断している³⁶⁾。

3. 社会的実体としての貨幣——岩井克人『貨幣論』に即して

相互作用を基軸に「貨幣」を説明したジンメルは、貨幣の「実体」存在をその営む諸機能の束に還元しようとしたが、こうした試みは当時、社会学において盛んに論議されていた社会実在論と社会名目論との論争を背景にしている。その対立は、社会を一つの超個人的な有機体と見るのか、それとも自ら考え行動するのは所詮個々の人間のみであることを前提に、社会を超個人的な制度や行動様式の機能と見るのかの相違である。ジンメルが社会を相互作用として捉えたとき、それは、個人的な実在ではないが、さりとてバラバラの個人の集合でもなく、個々人が相互作用を通じて社会化を遂げる「過程」であると捉えるものであって、この行き方は第三の道を選ぶものであったと理解できよう。実体は共時的に見れば、機能の総体であるが、通時的に見れば、一連のプロセスの流れに還元される。若い時の作品『社会的分化論』を踏まえれば、こうした推察は不合理ではない。社会的分化が進めば進むほど、古い社会は新たな機構に生まれ変わることによってエネルギーの節約が図れる。この社会工学の重要な推進役を担うのが貨幣である。貨幣もその形態を変えることにより、旧社会では拘束されていた大きなエネルギーを獲得し発揮するのである。

いずれにせよ、貨幣論の背後には、社会実在論か社会名目論かの対立があることが知られるが、この対立の奥に遡れば、中世哲学を彩った「普遍論争」に行き当たる。それは、普遍は実在するのかそれとも、実在するのは個物のみであり、普遍とは単なる名辞であり個物を表示する記号でしかないという争点をめぐっている。要約すれば、周知のとおり、*universalia ante rem* (普遍は個物に先立って存在する)、*universalia in rebus* (普遍は個物に内在する)、*universalia post rem* (普遍は個物の後に存在する) という三つの結論命題が相対立している。ところで、「実体」とは何であるか。それは「普遍」であるか、それならばプラトンの「イデア」に相当するであろうが、実はアリストテレスの「個物」も実体である。それのみならず、アリストテレス自身、「形相」(エイδος) を実体とも述べているのである。多くの経済学者や社会

学者、哲学者は「貨幣」に言及するとき、実体価値なる概念に触れているが、実体と価値とは、概念上、全く異なる次元にあることに留意しなければならない。実体は主語となって述語とならないが、価値は述語機能しか持たない。価値は実体的に「存在」しない。新カント派ふう言えば、「妥当する」のである。

こうした普遍論争に類似した議論を、今話題としている貨幣論に持ち込めば、貨幣の本質についていろいろな提議がなされそうであるが、それについては、管見ながら、次の三通りの見方が並立しそうである。その一つは、貨幣はそれ自体貴重な価値を持つ個別実体であると見る立場であり、第二は、貨幣は実体の単なる名目であって、本体の実体は消去しても差し支えないと見る立場である。そして第三に、貨幣は実体の象徴ではあるが、シンボル化された実体には、個物性を超えた何らかのア・プリオリ性が先行的に実在するといった立場である。この三つの立場は、先に述べた普遍論争の結論命題の一つ一つに明瞭に対応するものではないが、貨幣論争をたどるうえで、普遍論争の争点を思考の奥底に留めておくことは、無駄ではないと考える。

さて以上の前置きが続いて、「貨幣が貨幣であるのは、それがまさに貨幣であるからなのである」と述べたことで、斯界に反響を呼んだ経済学者岩井克人の『貨幣論』(1993年)を取り上げよう。本書において、岩井は、他の経済学者たちが、貨幣の実体的あるいは主体的根拠を与えようと努めることの空しさに、独自の「宙づり的な循環論法」によって反駁する。貨幣はそれ自体価値がある金銀で出来ているのでもなければ、法律の権威によって通用するものでもない。貨幣は無から有を生じるような奇跡によって生成したと言う。ところがのちに出版された対談書『資本主義から市民主義へ』(2006年)では、対談者が「貨幣には基盤がないということ。この貨幣の持っている底なしの不気味さがそのまま人間存在の不気味さに対応している」と示唆した岩井氏の慧眼を賞賛しているのに対し、「人間社会には、物理的な実体とは違う社会的実体がある」ということを述べている。対談者は、循環論法の示唆する潜在的恐怖が、人びとに超越的なものの要請という疑似根拠に誘いこ

む欺瞞を指摘したところに、岩井説の卓越性を認めたがっているが、岩井本人は、こうしたいささか虚無的な考えに同調しながらも、案外に穩健でポジティブな見解を示している。一方で、実体的根拠がないことを人間は怖がると述べながら、他方で、貨幣は共同幻想ではなくれっきとした「社会的実体」であると述べてもいるのである。それでは、「実体」という言葉を「社会的」が修飾する「社会的実体」という概念は何であるか、この問題を考えることが行論の焦点になるが、その前に、彼の『貨幣論』の概要を示さねばならない。

岩井は、貨幣の本質をめぐる典型的な議論として、貨幣商品説と貨幣法制説との二つを挙げている。前者の代表はマルクスであり、後者の方はアリストテレスである³⁷⁾。まず、マルクスは『経済学批判』で、「単純な価値形態」Aから「全体的な価値形態」Bが自然的に成立することを論じた。たとえば「家畜」のように、数多くの商品所有者に共通な欲望の対象となっていることによって、他の商品とは区別される。それぞれの商品所有者は、それが他の多くの商品所有者の欲望の対象となっていることを知ることによって、純粹に自らの利害に導かれて、この商品それ自身を使うためではなく、他の商品との交換のための媒介として間接的に需要するようになる。「家畜」を扇の要の位置に据え付ける「一般的な価値形態」Cが結果として成立するに至る。この特殊な商品種が社会的に占める独占的地位が貨幣形態Dで、それは、或る一つの商品が**交換過程の内部**で**自然発生的**に転化して生まれたものということになる。

ところが貨幣法制説の代表者アリストテレスによれば、歴史の始原に共同体が或るモノを貨幣として使うことを申し合わせたことによって、その或るモノが「媒介者」となり、「本当は不可能」な交換を「十分に可能」にすることになった。この申し合わせさえあれば、それ自体に商品としての価値がないものが貨幣として選ばれても、一向に構わない。その内容を「変更したり、役に立たないものにする」ことは、われわれの自由であるからである。この意味では、貨幣の起源は**交換過程の外部**のノモスに存することになる。

両説の相違を、ピュシスとノモスとのカテゴリー上の対比として捉えることも興味深いが、岩井によれば「一見対立している貨幣商品説も貨幣法制説も、ともに貨幣というものの現実的な存在に対して何らかの実体的な根拠を求めていることにおいては同罪である」。こうした説明はあとから合理的に貨幣発生史の歴史を説明する態度でしかない。「それは貨幣という存在の中核にある空虚に耐えることができずに、それをなんらかの実体で埋めつくそうとするところみにすぎない」³⁸⁾。それでは彼はどのように貨幣の生成を説こうとするのであろうか。ここに持ち出されるのが、何の実体的根拠を持ち出す必要もない貨幣の無限の循環論法である。少し長いが、本書の趣旨が凝縮されている重要な箇所と思うので、煩瑣をいとわず引用しよう。

「貨幣商品説のばあい、あるひとつの商品を扇のかなめとした全体的な価値形態 B の自然発生的な成立を、交換過程の内部における商品所有者の主観的な欲望の構造によって根拠づけようとした。これにたいして、貨幣法制説は、あるひとつのモノを扇のかなめとした一般的な価値形態 C の成立を、交換過程の外部に存在する人為的な権威によって根拠づけようとしているのである。だが、貨幣という存在は、自らの存在の根拠を自らで作り出す存在である。それは、全体的な価値形態 B と一般的な価値形態 C との間の無限の循環論法によって、宙づりの的に支えられているにすぎない。あるモノをすべての人が商品代わりに貨幣として受け入れるのは、そのあるモノをいつか貨幣として手放してさらに別の商品を手に入れるためであり、そのあるモノをいつか貨幣として手放してべつの商品を手に入れられるのは、そのあるモノをすべてのひとつがいつでもその商品の代わりに貨幣として受け入れてくれるはずだからである。……/このような無限の循環論法によって支えられている貨幣とは、その存在のためには何らかの実体的な根拠も必要としていない。それは、モノとモノとの直接的な交換の可能性を支配する人々の主観的な欲望の構造や、ひとつのモノを貨幣として指名する共同体や君主や市民や国家の権威には還元しえない、『何か』なのである。/貨幣がこのように、その存在に関して何の実体的な根拠を必要としないならば、その歴史的な生成に関しても、予め何の実体的な条件を一般的に想定することは不可能である。貨幣が『ない』ことと『ある』こととの間には乗り越えがたい断絶がある。そして、その断絶が現実において乗り越えられたとしたら、それは『歴史の偶然』、いや『歴史の事実性』としか言いようのない無根拠な出来事であり、ひとつの『奇跡』にはほかならない」(太字

強調は筆者による)³⁹⁾。

つまり、貨幣の系譜は、「本物」の貨幣の「代わり」がそれ自体で「本物」の貨幣になってしまう「奇跡」によって繰り返し寸断されている。その端緒にたどり着いても、見出されるのは、単なるモノが「本物」の貨幣へと跳躍しているさらに大きな断絶である。無から有が生まれていたのである。貨幣でないものの「代わり」が貨幣で「ある」ものになった。どのような意味においても、貨幣の「跳躍」を正当化しうる客観的な根拠はない。それにも拘らず、人びとは躊躇せず貨幣を日常的に貨幣として使っている。その結果、貨幣はひとからひとへと先送りされ、実際に貨幣としての価値を今ここで維持することになる。ではなぜそれが可能となるのか。その理由は、「過去をとりあえずの根拠として無限の未来へ向けての期待がつくられ、その無限の未来へ向けての期待によって現在なるものが現実として可能になるのである。貨幣ははじめから貨幣であるのではない。貨幣は貨幣になるのである。……ここでは日常的な意味での時間の先後関係がまさに宙づりにされ、因果の連鎖が無限の円環をなしている」⁴⁰⁾。

ところで、貨幣の存立をめぐるこの因果の連鎖は、実は岩井がマルクスの価値形態論を批判する独自の拠点、貨幣形態Zという無限の循環論法を踏まえるものである。それは、単純な価値形態Aを出発点として、全体的な価値形態Bが一般的な価値形態Cに進みながら、再び全体的価値形態Bへと折れ返る無限の循環である。その中であって貨幣は、両者の役割を商品世界の中で演じる役割を果たす。いったんこの循環が始まってしまうと、——歴史の奇跡によってであるが——「あたかもそれ自体で何らかの実体性を持っているかのように存在し始めることになる」(太字強調は筆者による)⁴¹⁾。あたかも自転する「時間」のように、貨幣は自らの存在の根拠を自らで作るのである。ここで「実体であるかのように」存在すると言うのは、貨幣の擬制的性格を示唆しているものと見ることができる。貨幣は「奇跡」により起こった自己言及的な循環をなすと言われるが、仔細に見れば、その通用は、過去の実効性に支えられた〈未来への心理的期待〉に支えられている。

モノとしての貨幣とは、本書で頻出する「みすばらしい金属のかけらや薄汚れた紙の切れ端や目にも見えない電磁気的なパルス」といった、物の数にも入らないモノでしかない。でも人びとがその物の数にも入らないモノを貨幣として使うとしたら、それはその物の数にも入らないモノを貨幣として受け取ってくれる人間が自分のほかに多数存在しており、この多数者自身もまた、それはそれで次世代の多数者を当てにするという形で信頼の先送りがなされるからである。逆から見れば、無限の未来の人間とは、「無価値なものを受け取り価値あるものを与えるという一方的な不等価交換の究極的なひきうけ人という役割を演じている」ことになり、こうした行為は贈与に当たるから、「紙きれとしての価値をはるかにこえてもつことになる一万円という価値とは、無限のかなたの未来に住む人間から今ここに住む人間へと送られてきた、気前のよい贈りものにほかならない」⁴²⁾ことになる。

結局「貨幣が貨幣として使われるのは、モノとしての貨幣の生産に人々の労働が投入されたからでもなければ、モノとしての貨幣に対して人々が主体的な欲望を抱いているからでもない。価値に人間の労働という**実体的な根拠**を与えようとしてきた古典派経済学やマルクス経済学も、価値に人間の欲望という**主体的な根拠**を与えようとした新古典派経済学も、貨幣という存在の前には無力である。……貨幣共同体という共同体には、貨幣を貨幣として使っていること以外に何の**実体性**もあるわけではない。それはただ、自らが未来永劫にわたって存在し続けるという宙づり的な期待によってのみ支えられている」(太字強調は筆者による)⁴³⁾にすぎない。商品に対する主観的欲望や、或る商品を強制的に使わせる国家による立法といった外部的要因がこの中に入り込む余地はない。貨幣通用の根拠を求める問いは、今や無用のものとされ、すべての人びとがそれを共通して貨幣として使えば、それが貨幣だという答えは同義反復のように思われる。それは形式論理学における同一律のように、等式の右辺と左辺を何度も入れ替えても、結果は同じで、先へ進まず堂々めぐりするかのようである。ただ異なる点は、貨幣の循環構造が、人びとの共通の信頼・期待に支えられているということである。ところが、この

信頼・期待が崩れる経済危機の場合が問題である。

岩井は、マルクスが「売り」において指摘した経済恐慌（パニック）とは正反対の方向，すなわち「買い」でも起こりうることを指摘した。これがハイパー・インフレーションの危機（クライシス）である。マルクスは、売買においては商品所有者と貨幣所有者との間に立場上の優劣があると見る。商品を持っている売り手は、他の選択なく貨幣獲得のみをもつばらに、その引き取り手を探すため苦慮を余儀なくされる。過剰生産・需要不足という状態にあるとき、引き受け手が見つからないと、長期の不況に入って経営は困難に陥る。これに比べれば、貨幣を持っている買い手は、商品に交換するのにさほどの困難はない。貨幣は希望に応じていかなる姿にも代わりうる。しかしながら、岩井は、売り手に劣らず買い手にも困難が待ち受けていると言う。それは、商品が減少し物価や賃金が加速度的に高騰するハイパー・インフレーションの事態に進展したときである⁴⁴⁾。

そのとき自明に流通していた貨幣が貨幣であり続けるのが困難となる。買うことの困難の方が、商品の貨幣への転化よりも、よほど「命がけの跳躍」Salto mortaleであることになる。貨幣の所有者は、商品を買ってくれなければ、手許には「みすぼらしい金属のかけらや薄汚れた紙の切れ端や目にも見えない電磁気的なパルス」しか残らない。これが資本主義の真のクライシスであり、貨幣が貨幣でなくなってしまう事態である。これに対して、モノを買ってくれる人がいなくなり、モノが売れなくなって惹き起こされる恐慌は、真のクライシスとは言えない。なぜなら、それは、貨幣の存在を支える社会が永続していくことを疑っていないからである。期待が無意味と化す「異邦人」との出会い、あるいは「最後の審判」が下る前日、このとき貨幣を受け取るものは誰もいないであろう⁴⁵⁾。

命がけであるはずのこのような跳躍が、しかしながら、日々当たり前のように行われていることに、岩井は驚く。それを正当化するのは、結局、「貨幣が今まで貨幣として使われてきたという事実そのものが、貨幣が無限の未来まで貨幣として使われ続けるというひとびとの期待」である。貨幣の日常

使用は、未来の人間に対し貨幣をそのまま引き受けてくれるという主観的期待に支えられているが、それは、未来永劫にわたって客観性が確立されないという意味において主観的ではない。それは「危うさ」を孕んだものとなる。

しかしながら、われわれは、貨幣の通用力の根拠を「無限の未来に向けての期待」などに負っているであろうか。むしろ、今日一般化した不換紙幣の通用は、むしろ岩井が否定した国家権力を背景とするのではあるまいか。それゆえに、通用力を保証する強制力の弱まった国家が存亡の危機にあるときこそ、「命がけの跳躍」が貨幣の方にも生じるのである。本書の批判を副題とする鈴木敏紀「貨幣の機能と信用」なる論文は、むしろ貨幣法制説と思われる立場から次のように批判している。「この『薄汚れた紙切れ』である国家紙幣などが流通する根拠は、『法の支配』機関である国家の権力による経済過程への介入という経済外的強制力の発動と法的権威に対する人々の『権威的信頼』にある。それゆえに国家紙幣の流通量は権威的恣意性にかかなり強く依存するものであるから、人々は『進行中のインフレーションがたんに一時的ではなく、将来ますます加速化していくにちがいない』と認識することも『予想』することも可能なのである。しかしその『予想』は、現在の人々が、『未来の人々』に対して『主観的期待』を欠いたために立てたものではなく、国家権力に対する共通の『権威的信頼』を動揺させ、不信任を抱いたか、または国家そのものの存亡の危機に直面したかの客観的な『根拠』に基づいて立てるものである」⁴⁶⁾。それゆえに、貨幣とは、岩井が述べるような、「無価値なモノを受け取り価値あるモノを与えるという一方的な不等価交換の役を引き受ける」無限のかなたの未来に住む人間が、今ここに住む人間へと送る「気前のよい贈りもの」であろうはずがない。

岩井は貨幣という「奇跡の」存在を説明するために、「未来からの贈りもの」という比喩をもって応えようとしたのであって、それを文字通りに受け取るには及ばない。彼の探究は貨幣の起源の発生的考察ではなく、貨幣の通用の哲学的根拠に重点があるからである。ありふれた貨幣の使用に岩井が感

じた「驚き」の意味を追体験できなければ、批判は上滑りしてしまうであろう。もっとも氏は、「驚き」を機縁に形而上学への道を探る気はないから、答えは、擬制の比喩的表現で応じたままである。鈴木による上述の批判は、貨幣の通用を「国家権力に対する共通の権威的信頼」に求めるものであるが、国家がまだ成立していなかった状態においても交換が行われていた以上、原始貨幣が使用されていたことは知られている。とすれば、貨幣の通用根拠は、国家成立の有無には無関係であるとも言えよう。金本位制が破綻し信用経済に入っていることは承知のうえで示された岩井の「驚き」は、貨幣が無から有へと飛躍した後の宙ぶりの自己循環という形で収まったが、鈴木論文は、これを、学問の世界に入れるべきでない「奇跡」という言葉を用いた非学問的な論理であると論難した。実際「宙ぶり」は無根拠であるから、不安定な気持ちに誘う。ここより人は安定を求めたくなり、実際、岩井自身も、後の作品『資本主義から市民主義へ』で、自説を保持しながらも「社会的実体」という言葉を登場させているのである。本書を貫く一つのテーマは、言語・法・貨幣が社会的実体であるということであり、自然科学や生命科学によって把握されるのとは別な世界があるということである。そこで上に述べたことに連関する範囲で、本書の概要を摘示することにしよう（対談の口語調を文語に改める）。

岩井によれば、「自己循環論法は、根底が不在であるといえれば不在だが不安に陥ることはない。なぜならそれこそが**社会的実体**というもののあり方だからである。人間はそのようにして社会をかたちづくり、歴史を歩んできた。それは虚構といえ最大虚構だが、**人間の一存でどうにかなるものではなく、客観的なもの、まさに実体として存在しているのだ**ということである」（太字強調は筆者による）⁴⁷⁾。このことを分かりやすく説明するため次の例を設ける。「道を歩いていて、石ではなく紙切れにぶつかったらつまずきはしない。踏みつけてそのまま歩いていってしまう。でも、もしその紙切れに福沢論吉の顔が印刷されていれば、はっとして立ち止まる。そして、それを拾おうとする。一万円札だからだ。ところが、拾おうとしたとき、運悪く、風

が吹いてきて飛ばされ、他人の家の庭に入ってしまったとする。その庭の柵はたいして高くなくて、ちょっと足を上げれば乗り越えられそうだ。物理的にはたいしたものではないが、他人の庭にはいるのはためらわれる。だが、出来心で入ってしまったとする。ところが、また運悪く、その家の人に見とめられ『泥棒!』と呼ばれると、一目散で逃げ出す⁴⁸⁾。

岩井によれば、一万円札は物理的には紙切れにすぎないが、石よりもはるかに**実体的**にひとの動きを止めてしまう。庭の周りの柵も物理的には乗り越えるのは簡単だが、法律上の所有権の範囲を示す「しるし」として、城壁より効果的にひとの進入を防ぐ。「泥棒!」という言葉も、空気の振動にすぎないが、石を投げつけるよりも効果的にひとを庭から追い払う。貨幣も法も言語も、物理的には何でもないが、貨幣なら価値を持ち、法なら権利と義務を確定し、言語なら意味を伝えることで、石のような物理的実体よりもはるかに強力な**実体性**をもってひとの行動を制約する。言語・法・貨幣はこのように物理的な存在に還元できない**実体性**を持っている⁴⁹⁾。それらが帯びた目に見えない意味は、理解する者に威力を持つ。

物理的な存在に還元できない「**実体性**」とは、精神的存在が具体的力を与えるあり方を指すのであろう。言語・法・貨幣はけっして単なる共同幻想ではなく、「**社会的実体**」であると説くのは、それらは常に物理的な力に変換されうる可能性を持つということを根拠においている⁵⁰⁾。こうした変換力は精神的信用を前提とする物理的・心理的実効力と言える。ところで他方、言語・法・貨幣は、それを言語・法・貨幣として承認しそのように取り扱っている社会を離れてしまえば、その**実体性**を失ってしまい、単なる空気の振動や簡単に乗り越えられる柵や吹けば飛ぶような紙切れになってしまう。したがって、それらはいずれも一つの社会の中でしか機能しないという意味で、「**社会的な実体**」と規定される⁵¹⁾。

いずれにせよ、「生活をともにしたことの無い相手ともコミュニケーションでき、腕力のかなわない相手とも契約が結べ、自分の欲しいモノをもっていない相手とも交換できる。人間社会というのは、個々の人間の集まりでは

なく、抽象的な意味での人間同士の関係である⁵²⁾。こうして、「言語・法・貨幣を媒介として、人間は初めて抽象的な意味での「人間」として社会を形成することができる。……それこそが**人間の本性である**」(太字強調は筆者による)⁵³⁾。こうして、貨幣の根拠に、今までの行論から予想されない「人間の自然本性」が誘い出されてきた。「人間を人間として成立させる言語・法・貨幣といった社会的な媒介は、自然から与えられたものでもなければ、人間が合理的に作り上げたものでもない」。岩井は、ハイエクの表現を用いて「本能と理性との間の存在」、つまり「自然でも人為でもないその中間的な存在」と慎重に位置づけている⁵⁴⁾。もちろんここに言う「自然」概念は、遺伝子の中に書きこまれている本能といった類の生物学的理解であって、アリストテレスが理解している哲学的意味ではなく、近代自然科学上の理解を当然の前提にしている。ではその「あいだ」とは何か、がさらに突き進んで問われなければならないテーマになるだろうが、岩井にしてみれば、この「あいだ」は完全には信用のならないもので、中心には穴があいている。

ここまで来ても、「自己循環論法によって成立するものは、常にパニックの危機をはらむ」という持論が放棄されているわけではない。「商品の場合はその人がそれをモノとして欲しいからだ、貨幣の場合は、その人が欲しいのは、他の人たちも、さらにまた別の人たちも、それに価値があると思っているからにすぎない。……つまり、リンゴのように最後にそれを食べる人がいるわけではない。実体的な意味での人間の欲求がどこにも介在していない。無限に広がっていく他者である。そこにはなんの実体性もない⁵⁵⁾。「他者の欲望は支えとして考えられているが、欲望の他者性というのは、その支えが無限に後退していくということで、支えのなさとして考えられる」(以上、太字強調は筆者による)⁵⁶⁾。

「価値があると思っている貨幣や、権利を与えてくれると思っている法や、意味を与えてくれると思っている言語が、価値や効力や意味を失うとどうなるか。人間は人間でなくなってしまう。人間とは言語・法・貨幣によって人間となる社会的生物だから、言語・法・貨幣は人間の本性そのものと

言っている。それが突然、無に化したとき、まさに人間は『人間』でなくなる⁵⁷⁾。しかし、終生貨幣をもち続けるひとは誰もいない。任意の時点で放棄しつつ生きている。ふつう貨幣の不通用が想定される場合は、戦争や内乱といった歴史的な個別的例外状況であろう。対話不能な「異邦人」の設定や「最後の審判」のラッパが鳴る事態を引き合いに出すことは説得力がないように思われる。そうであるなら、「本性」*natura*の定義に従って、ひとは再び事態に即応した新たな貨幣制度を作るまでである。人間は人間であろうとする必然性を内包するがゆえに、こわされた法の後は無法のまま放置されずに、新たな法制度を制定するのと同様である。このことの例外はないであろう。国家は打倒されても、その後に無政府の社会が成立したためしはない。ユダヤ民族は、何千年もの間さすらっても、建国の悲願を忘れていない。本性は、追い払われても永劫に回帰するのである。貨幣であっても、それがどのような形態をとろうと、消滅したためしがないし、おそらく将来もないであろう。せつかく「本性」への言及に達しながら、この意義を堅持できないため、繫留地を失い、再び、宙づりの自己循環形態へ浮き上がるのである。

4. 象徴としての貨幣——吉沢英成『貨幣と象徴』に即して

吉沢もまた、貨幣の本質を探るための出発点を「交換」に求める。その探究は、「交換」概念を普遍化し、ふつうは交換の典型とされる市場経済をも、単なる「特殊な」形態として位置づける根本的な視点を獲得することにある。近代的市場交換は、自立した個人をもととする自己愛や自己利益によって営まれるが、他愛をもとに成り立つ「共同体」における交換形態の固有性に着目し、前者の相対化を図ろうとした。その手立てとなるのが、原始経済の研究である。経済人類学者カール・ポランニーのユニークな研究をはじめ、現地調査をベースとした民俗学者マルセル・モースの『贈与論』や人類学者マリノフスキー、それに続く文化人類学者レヴィ=ストロースの神話的思考が参照される。これらの一連の研究を通して、非市場経済においても原始貨幣が通用しており、それが交換においていわゆる「集合的表象」に繫留した

独自性を有していることを突き止め、貨幣がその象徴的機能を担っていたことから、現在経済もまた、象徴的貨幣による「交換」の一特殊な在り方でしかないと相対化される。したがって提起される問題の射程は遠く、究極的には地上を漂泊する世論や権力の繫留点たる「精神の原型」を天上に求めることが、解決の決め手になるとされるようである。貨幣は実にこうした広範囲の射程をもって放射する精神の光源にまで押し上げられる。

以上のような問題意識を持って臨む吉沢の『貨幣と象徴』（1981年）の基本的論点は「はしがき」のところで、次の三点にまとめられている⁵⁸⁾。①「貨幣は人びとが貨幣だと思ふから貨幣でありうる、集合表象だということである」。②「貨幣は経済の手段なのでなく、むしろ、経済の方が貨幣を前提にして、貨幣のもとでなされる物質代謝の営みなのである。それが象徴を操る動物である人間にとっての基本的なすがたである」。③「貨幣は人間社会と共にあつたし、またあり続ける。貨幣はどこからも生まれなかつたし、どこへも消えて無くなりはいしない。人間は貨幣からは逃れられないのである」。

上述の基本的論点を踏まえるなら、本書でまず「交換」がどのように捉えられていたかを確認しておくことが適切であろう。たとえば、ある村で狩猟が行われるとき、弓矢の改良によって多大の獲物を得た感謝の気持ちとして、村から多くの配分を得るとき、本人は今後みずから狩猟に参加しないでも、弓矢の改良のみに専念することによって、一定の獲物の配分を期待できるようになる。これが分業の始まりである。分業は、個人一身の生活を社会全体に委ねてしまう決意を前提にしているが、それを可能にするのが、人間の交換性向である。この交換が人間の本性であることを力説したのが、アダム・スミスであった。

『国富論』では、分業は人間が持つ「交換性向 propensity to truck, barter and exchange」の必然的結果であり、この性向は他の動物種には見られない根源的な人間性に属するものであるとされる。吉沢もまた、このテーゼを出発点にとって、「交換性向は……人間にとって言語がそうであるように、絶対的に植え込まれた社会的因子、絶対的性向として存在する」と述べる

(この趣旨は、従来の経済行為の説明が多くはロビンソン・クルソー物語という「単体モデル」に依拠してきたことの不十分さを批判することにある。また、市場を独立した競技人から捉える「複数モデル」によっても、それは「単体モデル」の延長に立って、「複数のロビンソン・クルソーの交換を対象にしたにすぎない」⁵⁹⁾。この「交換性向」をいかにして正しく捉えるかが問題である。交換は、人間が多数集まっている社会では必ずや現れるがゆえに、その関係は共同体内での交換と、共同体間の交換とであるが、両者には違いがあるという従来の見解を吟味する。著名なテニースの社会類型「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」を「交換」類型の相違に援用すれば、前者の交換関係は人格的利他的な性質であり、後者のそれは即物的利己的な性質であると一応見なされる。本書では、後者の代表として、アダム・スミスが、前者の代表として、マルクスとM. ウェーバーが挙げられるが、今日ではこうした理解は修正されており、交換形態がいずれであれ、利他と利己という単純な二分法は当て嵌まらず、いずれの交換にも程度の差を含みつつも、両方の性質を持つことが指摘されている。言い換えれば、同胞愛と利己心とは錯綜しているのである。もっとも本書では「交換の端緒を利己心とはいちおう区別された交換性向に求めたスミスの議論の方が、ウェーバー的なものより当を失っている度が小さいといえよう」⁶⁰⁾として、交換性向の方が利己心よりもより一般的基礎を形成していると結論づけた。

実際、アダム・スミスの交換性向にしても、相手の好意に基づく助力に期待するのではなく、相手の利己心に訴えて説得することが、取引を成立させる要諦であるとされる一方、個人の余剰生産物を「社会の共同資産」に高めるうえで、『道徳感情論』にいう「共感に基づく互恵的な利他心」の役割も強調されている。また、期待の大きいK. ポランニーにしても、未開社会へと目を向けてはいるものの「市場と反市場の対比への強いこだわりをみせて」おり、反市場像を構成するための「鏡像」を求めている限り、なお市場像を「原像」とする伝統的経済思考から抜け出していない。むしろ、問題なのは「未開像と現実像とを出現せしめる鏡の位置に原型があるものとし」、ここに

分析の努力を向けるべきだと言う。ポランニーは未開経済を対象とすることで、「社会に埋め込まれた経済」という概念を、反市場主義の原理とするよりも、「経済に関する一般的フレームワーク」を構築する観点となすべきであったと残念に思っているようである⁶¹⁾。吉沢の目標は、交換性向の含むもっと根源的な意味を尋ねることであった。

そこで前進への大きな手がかりとする理論が、モースの『贈与論』である。モースは、未開社会における財の移動を、贈り物をめぐる贈与・受領・返礼の義務を中心に展開した。モースの言う贈与は、たんに経済領域に限定されない法・政治・宗教・芸術をも含む「全体的な社会的事実」(デュルケームの「社会的事実」を受け継ぐ)である⁶²⁾。この意味で、吉沢が追究する根源的な「交換」観念の解明に資するものであった。贈り物には、ハウという霊力が宿る。しかし、ここが肝腎であると筆者には思われるが、ハウは送り手のところへ戻ろうとする性格を持つとされる。返礼を怠り受け手の所に留まり続けるなら、ハウは死さえもたらしかねないが、お返しがあるときはそれに宿って送り手に戻ってくると信じられた。このような呪術的な観念が贈り物には付着しており、財の移動過程を貫いて反対給付を義務づけ、同時に、未開社会の絆をいっそう強める役割を果たした。交換は、二者間の限定的な互酬関係であるが、多数者間の円環的な関係において第三者からお返しを受けるのが一般的交換である。ハウの名において、人と物、物と物、人と人とが融合し合う。贈与は、単なる物の贈与ではなく、むしろハウの宿る物自体が、生命、人格、感情を持ったのである。この意味において贈与は象徴交換のシステムであり、それを理解するには、各項の内容よりも構造全体の方が優先的に問われねばならぬとした。

こうしたモースの見解から、吉沢は一步踏み込んでモース自身避けていた「貨幣の本質」を引き出そうとした。彼によれば、貨幣は商品と商品とを交換するために発明された道具ではない。まず人間には根源的な交換性向があって、その具体的な現れが貨幣であると考えた。貨幣は、それ自体が人びとの交換性向において「原型」をなすもので、かえって経済社会を導くので

ある。「貨幣は経済の手段なのではなく、むしろ、経済の方が貨幣を前提にして、貨幣のもとでなされる物質代謝の営み」であると見なされる。貨幣は、素材的な実在ではなく、むしろシンボル体系を共有する「集合的表象」である。人間は、そのシンボリック思考を営むことによって動物を超える。このような洞察は、「原始貨幣の資料発見が増加するにつれて歴史主義的に問題を限定して」しまい、貨幣の具体的な形状や機能の研究に終始する伝統的経済学を超えて、形而上学ならぬ「経而上学」(メタ・エコノミクス)の必要を訴える⁶³⁾。

それでは「経而上学」のテーマである「貨幣の原型」はいかにして理解できるのであろうか。ここにおいて吉沢は、かねてより示唆していた貨幣と言語の類比論へと踏み込む。実際また、言語こそ集合表象の最たるものである。「人間を人間とするのは言語であるというのと同じ次元で、人間を人間とするのは財の交換であり、人間の物質代謝を人間のそれとして特徴づけているのは交換である」⁶⁴⁾。両者のアナロジー論は、マルクスやルフェーブルを捉えた魅力的なテーマであった。マルクスは、言語が人間の社会的産物として人間の間を流通するのは、貨幣が商品の社会的産物であり商品間を媒介する特殊な言語であると、類比したし、ルフェーブルは、マルクスの観点を継承し、言語体系ラングを、真に人間的な情感を直接に語るパロールと、商品世界に通用する月並みなディスクールという二項によって構成されるものとして、この二項の間に、貨幣によって疎外された人間関係、物神的性格を見出した。しかしながら、吉沢は、ルフェーブルが見出したこの二項関係を「既にイデオロギーと化したマルクスの疎外論、商品物神化論によって意義づけるのではなく、彼のいうラング(=原型)に位置づけ、それをもって商品世界ないしは経済財の世界の構造把握に適用してみることにあった」と惜しんでいる⁶⁵⁾。

ここで彼が目にしたのが、マルキストであると同時に、E.フッサールの「現象学」にも通じていたわが国の本多謙三の二論文であった⁶⁶⁾。その内の一篇「貨幣の存在論——貨幣における先天的なるもの」という題名が示唆するよ

うに、フッサールの言う「創与的作用 originärgebender Akt」には、感性的対象のみならず、非感性的対象が存在するのであり、後者の認識可能性がこれまで経験論によって妨げられてきたが、後者こそが認識（＝抽象）を認識する先験的なもので、ここに、言語の意味する対象の象徴関係が正当に照射される場所であるとした。「感性においては、象徴するものと象徴されるものとの相属関係が一義性を持っており、言わば象徴の封鎖的体系を成して居り、主観的に束縛された静的な再現であるのに対し、概念的思惟は之に反して主観的に自由な、それ故に客観的に適合することが出来、かつ目的を意識させる象徴構成であるという点に存する」⁶⁷⁾。この目的の適合はしたがって「開放的」である。言語において本質的なことは、その表現自体の音声よりも、表現される観念、指示される対象にあるように、貨幣においても本質は素材面ではなく、その先天的なところにあると見た。ところが、貨幣が交換過程で流通する以上、そうした類比によって、物理的対象である側面が閉却されることになる。「経済財が常に存在する以上、貨幣は理念ではなく、必ず実在する」⁶⁸⁾。以上のような批判を踏まえて、吉沢は、貨幣と言語との対応から、両者にとって重要な規定を引き出すためには、「類比を超えて、貨幣・商品世界と言語・象徴体系との構造的対比、それら構造間に同型性を相互に探りあてねばならない」⁶⁹⁾と主張する。この同型性は、「精神作用の型式」という本書で頻出するキー概念となる。この原型を最も単純な形で取り出せば、「全体」と「部分」の二語とその関係に求められるが、その記述はきわめて抽象度の高いものである。重要なので、長くなるがそのまま以下引用しよう。

「部分は部分として、隣りの、あるいは他の部分とは区別され、それらと並立する。部分は他とは区別され他にはなりえない点で、本多のいう、静態的・固定的な一義的相属関係を持っている。全体は部分と同様、それ自体でありうるが、さらに諸部分から成るものとして部分を代位しうる。全体は、これまた本多のいう流動的で開放的な構成を持っている。全体は部分を包括するが部分は少なくとも一個の部分としては全体を包含することはない。しかも全体と部分とは並立し、相合して空虚でない一型式の全体をつくっている。その面では

『全体』も『部分』も型を構成する要素であって、『全体』も部分となる。だがたんなる部分ではない。われわれは一要素としての全体、部分としての全体を『中心』と呼んで、全体と部分がたんに並立する二要素であるだけでなく、包含・被包含、相属関係等のハイラーキー関係をも内包していることを示す⁷⁰⁾。

この箇所ですべての要点は、全体は部分に還元されえないのであり、中心のない諸部分をいくら結び合わせても、そこから中心のある型式を生起させることはできない、ということである。全体は部分によって生成させられない。むしろ、全体と部分は、精神作用にとってのア・プリオリな二契機であって、全体と部分からなるこの型式は精神作用の発現する枠組みとなっている。ここで精神作用というのは認識作用のみならず、認識作用の対象にもなる社会制度を作り出す人為作用すべてに及んでいる。しかも、「人間はこの型式の外部に存在するのではない。この型式以外に動機をもつ主体があって、この型式を操作するのではない。むしろ人間はこの型式にすべて埋め込まれており、この型式から能動性をうけとっているといえよう。どのようにしてかという、この型式における全体の要素、中心の機能にかかわってである。部分との関係でいえば、部分が部分となるためには全体の中に位置づけられなければならない。部分は全体との関係において部分となる。部分は中心との関係において部分である。……中心とそれに関係づけられた部分とからなる全体を、体系とよぼう。もともと、中心は体系の要素でありながら全体であり中心であるという関係にあるところから、部分を超越した部分、存在を超越した存在、すべての象徴を象徴する象徴、という性格をもつ。この関係によって、中心は部分を位置づけ、部分に意味を与えるかたちで、自分自身の意味をあらわす一方では、これのみでは充実されつくさない、これ以上のものをつねに残す⁷¹⁾。これが、中心項に見られる「余剰」である。この余剰が精神作用の真髄である。この旨を彼は次のように述べる。

「精神作用は、つねに未知なる領域や不確定なる推移、混沌に圍繞されている。われわれのまわりは変幻極まらず、無限の様相を秘めているともいえよう。だが、精神作用は余剰の空白を秘めた中心項をもつことによって、型

として閉鎖性をもちながらも、開放性を保持し、圍繞する混沌に安定的に対処することを可能としている。体系の要素の数は限定され（閉鎖性）ながら、余剰をもつ中心項の意味づけの働きによって、われわれにかかわってくる混沌の一部を部分として意味づけていく（系の開放性）。このようにみると中心とは、既存の部分の意味づける力と、いまだ知られざる部分を生み出す力とを与えられた項であり、いまだ知られざる意味を賦与する力でもある」⁷²⁾。吉沢はこの「中心」をまた、われわれもしかと知りつくしえない「意味の貯蔵庫」とも表現している。

人間がこの原型の中に埋めつくされた精神作用において生きるとは、この「貯蔵庫」から意味を新たに引き出すことによって意味の体系を豊かにしたり、意味の体系に変更をもたらしたりすることである。経済活動について言えば、裸のままの物質代謝などありえず、中心から意味づけ、部分として位置づける精神作用の型を通してしかなされえない。個々の財は中心項との関係においてはじめて財とされるのであって、こうしたことは原型の財次元での顕れである。この次元での中心項が「貨幣」である。「貨幣はこの次元の一項、財である。貨幣は貨幣材のもつ物質的性格によって貨幣になっていないのと同様、この次元をつくっている財も、その物質的諸特性のみにおいて世界を構成するのではない。貨幣との関係、貨幣によって意味づけられて財となっている。その意味で財は、物を素材として、それ以上の意味をもったもの、あるいは素材によって素材そのものとは別の意味を顕わすのである」⁷³⁾。

ここに貨幣の「創発的特性」が示される。それは、個人と個人との関係から生まれるのではなく、反対に、個人をして一般的なもの承認させる「集合的思考のカテゴリー」である。それは交換の結果、思わざる結果として現れるものでもなければ、おそらく岩井の言う「奇跡」にもよらず、「人間の他の特性にも還元しえぬ人間の本性であり、同時に人間間の本性」⁷⁴⁾である。ここにもまた、「人間の本性」というわれわれが行論の根底に置いている基本概念が現れたことをひとまず指摘しておこう。いずれにせよ、貨幣が

原型の中で、ア・プリアリに相互作用とともに併存しているからには、もはや貨幣は生成するものでもないし、発明されるものでもなくなる。貨幣を中心項とする原型は既に与えられている。「諸状況のなかで人間のなすことは、この貨幣の項にどのような観念を埋めこみ、どのような素材をあてはめるか、中心のもつ空白・余剰、『意味の貯蔵』からどのような意味をひきだすかとなる」⁷⁵⁾のみである。

今や、財に含まれた価値よりも、さらには財の交換よりも貨幣の方が先立つとの規定が与えられる。「貨幣は財の相関関係を象徴するものでもないし、既に財に含まれた価値を象徴するものでもない。貨幣が財を素材とする象徴体系をつくるのであり、貨幣の存在によって財の相関関係をつくるのである。貨幣が財としてこの体系内に物を取りこむのであり、価値を与えるのだ。財の交換が貨幣を生みだすのもない。物々交換においても、必ずや貨幣観念が巡っているはずである。財の交換とは貨幣を共有しあう人との関係といえようし、貨幣は『共同体を崩壊させる』のではなく、共同体をつくる、とも言えるのである。……貨幣のすがたであらわれるこの原型こそ、人間に、すなわち人の内部と人々の間にある、自律的実在としての関係であり、言語にも、さらには他の象徴体系にもみいだされる。この原型を無意識のうちに予感するからこそ、貨幣論の歴史のなかで貨幣と言語との類比がしばしば語られてきたのである」⁷⁶⁾。

以上、本書第6章「貨幣と言語——その同型性」で提唱された内容を煩瑣をいとわず摘述した。それというのも、この箇所は、本書の独創性が現れている箇所であるが、また理解に困難な箇所でもあるからである。どのような文化的生産物であっても、いやしくもそうと呼べるには、必ずや精神作用の原型の刻印を受けているという信念は、首尾一貫している。この点で、貨幣論議は、貨幣生成論から貨幣本質論の場に移される。しかし、移された場は、「認識作用の認識」の構造の解明に入るので、きわめて抽象的哲学的な思考を要する。その中でも、「全体」と「部分」との「関係」、ならびに「中心項」に関する記述は、通常理解とは異なっている。全体と部分は、フツ

サールの『論理学研究』第3巻で緻密に議論されたテーマでもあり、本多の議論を受けて、吉沢もかなり踏み込んで議論しているようであるが、「中心項」に関する明確な議論は、そこにはない。ここに吉沢理論の固有性がありそうであるが、それについて筆者なりに覚えた疑問を解消するよう以下努めてみよう。

その箇所は、『全体』も『部分』も型を構成する要素であって、『全体』も部分となる。だがたんなる部分ではない。われわれは一要素としての全体、部分としての全体を『中心』と呼んで、全体と部分がたんに並立する二要素であるだけでなく、包含・被包含、相属関係等のハイラーキー関係をも内包している」ことを示そうとしている一節である。一方、全体は部分を包括するハイラーキー関係にあると言いながら、他方、全体は部分と並立する「型を構成する要素」であると述べている。言い換えれば、全体と部分とは上下の縦の関係にありながら、他方では、並立する横の関係にあるということになる。これは明らかに矛盾した表現であるが、「型式」が全体と部分を統一するもので、部分としての全体が「中心」と呼ばれることに、この謎を解くカギがありそうである。

これは、既に見ておいたジンメルとの相互作用に関する吉沢の独自の方法論的解釈を含む見解と併せ読めば、理解の糸口をつかめる。精神作用の「型式」は、二つの異なる契機を有する。それは、吉沢の強調するア・プリオリな統一作用とジンメルと言う相互作用とである。ところが、統一化作用は、相互作用をも部分として含む全体化作用でもある。一般に、ジンメルの哲学は個人間の直接的関係を基本に社会を理解する方法論的個人主義に立脚し、一切の事象が相互依存の関係にある相対主義の哲学であると思われる。したがって、その作用から生み出される媒体は、個人間の相互作用から派生した二次的なものでしかないと理解されがちである。しかしながら吉沢によれば、ジンメルの主張した相対主義の哲学は、たんに「相互作用」が想起させる同一平面上の複数の独立単位の存在のみをもとに思念されたものではなかった。

では、ジンメルの相対主義の哲学は、人間の精神作用をどのような形で取り込んでいたのだろうか。吉沢によれば、「精神は自己自身を考察する部分と考察される部分とに分割する能力を持っているが、……ジンメルはこの分割すらも『我と他の人格との関係のアナロジーによって成立する』とする。そして『自己自身の彼方に自己を置くこと』の可能な精神が、憧憬し生みだすに違いない『絶対的なもの』も、すべて『関係』にまで分解し、さらに『新たな関係の根拠として現れる絶対的なものについても再び同一の手続きを繰り返す』。この精神を主体とするいわば無限の過程では、相対主義と、これとは対極の絶対主義的・実体論的原理とが交替し均衡し合うことになり、この過程自体が、なにものをも（したがって相対主義自体をも）相対化する相対主義の正当性を明らかにする。ジンメルは相対主義に、相互作用、相互依存といった契機のほか、『全体性』、『統一性』を目指す主客の相互作用の結果としての無限の動的過程を加えることで、自らの相対主義を特徴づけた」⁷⁷⁾のである。

吉沢がジンメル解釈に即して強調する「精神作用の形式のア・プリオリ性」とは、継起してあらわれる相互性と絶対的なもの、関係と実体のことであって、それは実はア・プリオリな精神作用を構成する二契機である⁷⁸⁾。ここにドイツ観念論者フィヒテを思わせる「自我」の働きの精緻な構造分析が現れる。一切の経験を顧慮せずに内省において直証できるのが自我である。「無限に自我を考察される部分と考察する部分とに分割していても、そこに産出されるのは、いつもこのア・プリオリな二契機である。そもそも自我を考察される部分と考察する部分に分割すること自体、この二契機がつくりだす形式であり、根源的なこの分割がア・プリオリにみえる二契機をつくりだしている。同じことだが、絶対的なものを関係に分解・還元したとしても、そこに産出される関係は相互関係といういわば横の関係と、上下の縦の関係とから成らざるをえない。絶対的なものと関係、あるいは縦横の二契機、いずれにせよ、関係へと分解を続けても二契機は解消されえない。関係そのものが実体であり、実体は関係形式を措いてはないのであり、関係諸形

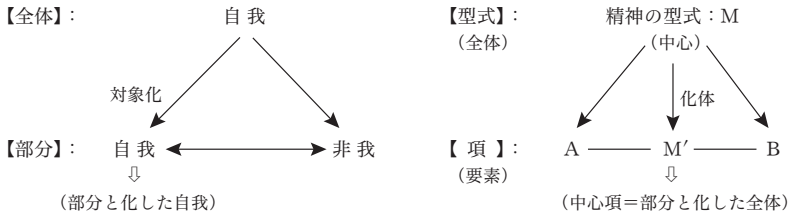
式の体系こそ絶対的である」⁷⁹⁾。

もつとも、吉沢によれば、「価値なくして交換なし、交換なくして価値なし」とするジンメルにおいて、価値を優先させる見方をとらなかつたことを遺憾に思っている。「ジンメルは……彼自身が『経済』に与えた限定、すなわち享楽対象との『隔たり』を埋めるための犠牲的交換という限定から導出される『経済価値』（交換価値ということになる）規定を想起することによって、何度となく逆戻りする」⁸⁰⁾と議論のブレを指摘する。たとえば、ジンメルは「われわれの考察にとっては、多産的で真に啓発的なものは交換から価値への道である。……価値がわれわれには犠牲的過程の結果として現れるということ、このことは無限の富を明らかにし、われわれの生活は、この根本形式のお蔭でこの富を手に入れる。犠牲のできるかぎりの縮小化への努力とこれの痛切な感覚とは、犠牲の完全な廃止にして初めて生活を最高の価値にまで高めるであろう……」⁸¹⁾とも述べている。

このように、ジンメルにおいてシンボル性の高いと思われる「価値」概念が「経済的価値」に適用されなかつたため、主観性の強い個人主義的・功利主義的傾向の価値規定に依存していた、という点を惜しんでいる。しかしながら、「この『経済価値』の規定が相互依存、相互作用という一面的な相対主義の哲学に照応するものであったとすれば、『価値』概念はジンメルの相対主義の哲学にたんなる相互依存、相互作用以外の契機が含まれることを示唆するものである」（太字強調は筆者による）⁸²⁾。ここに言う『相互作用以外の契機』とは、左右の平面的関係ではなく、上下の超越論的な関係の存することを示唆する。こうした吉沢の「価値」観は、ジンメル自身が踏まえたどちらかという心理的観念ではなく、「生の哲学」の中にもカントの批判主義的精神を貫こうとする姿勢に基づくものと推察できる。

新カント主義でも、存在と価値を峻別する論理主義的傾向の強いマールブルク学派とは異なり、存在に関係する文化価値のア・プリオリ性を強調する西南学派に親近性を持つジンメルは、その「文化」概念が形式的で精彩を欠くのに反発を覚え、「生」の概念を導入したのであろう。しかしこのことは

価値の相対主義に陥る危険を孕むことになるが、それでも相対主義をさらに相対化していく超越論主義の精神を維持せんとする姿勢があることが忘れられてはならない。吉沢が、間主観的な経済現象を認識するに当たって、個人活動の集積から出発して全体の把握へ進む方法論的個人主義に飽き足らず、それを凌駕する適切な精神科学方法論を求めて、そもそも人間における「精神作用の原型」がいかなるものであるかを闡明することが先決的な問題だとする研究方針が、上記のジンメル解釈の根底にある。以上の考察を踏まえるなら、今や、全体と部分の関係につき一見矛盾しているように見えた吉沢の説明は、自我の構造分析から以下のように跡づけることができる。



もっとも、フッサール現象学によれば、関係を構成する「要素」のみが独立的対象であり、その交互的に働き合う状態を概念にまで把握したものが「関係」である以上、「関係」の表象は抽象的なものとならざるをえない。それは「非独立的対象」であり、「高次の対象」でもある。要素の「関係」が思考の対象となるということは、要素たる「事物」が思考の対象となることは、レベルの異なった話であることに注意することが肝要である⁸³⁾。「関係」は、「事物」ではなく、中世哲学の用語を用いれば、超越的な「或るもの」aliquidである。日本国を構成する島々は、それぞれ独立した対象であるが、それらが「寄り集まって成立する」Zusammenbestehen (Seinではない)「日本国」は、目に見えない「関係」によってはじめて理解できる。この「関係」という「中心」が、島々という「項」を単なる物理的存在以上の実在に高めると言えよう。「中心」を象徴するのが人であれば、それは「天皇」であるし、「旗」であれば日章旗である。アメリカ合衆国でも地理的に離れている

アラスカやハワイもまた、統一を象徴する星条旗のもとに連関成立している。フッサールはこのように、全体を要素、すなわち部分同士の「基づけ」Fundierung 関係として説明した。「関係」は「土台」なくしては「存在」しえない限りで、「非独立的」であるが、土台はこの「非独立的」関係なくして統一の実在として「成立」しない。およそ文化形態は、平面に並存する諸対象が「一」へと関係づけられることによって身を起こし、立体的構図の中から改めて新しい意味を受け取ることによって、「成立する」bestehenのである。

ではそのような超越的な「関係」を認識する手立ては何であろうか。フッサールは「直観」能力の拡張によって、感性的対象のみならず、「関係」といった非感性的な対象をも把握の射程に入れた。いわゆる「範疇的直観」である⁸⁴⁾。しかしながら、そのような「範疇的直観」が、われわれの念じる「人間の本性的な認識」にどのように担われているかは、明らかでない。現象学は存在論であることを自称しているが、伝統的な意味でのそれではない。概して、現象学は認識の客観性を重んじ、実際、認識論の範囲ではそれも正当な態度であるが、実践論に機軸を置く経済学において、表象・観念(イデー)の世界に終始することは適正とは言えない。秩序づけるものと秩序づけられたものは、貨幣という「一」によって「感染し」、具体性の程度こそあれ、いずれも抽象的世界にあるのである。吉沢理論も、精神作用の原型を求めて、ア・プリオリな思考へと遡及していったが、そこから逆転して展望される世界は、「物神性の遍在する世界」である。

確かに、本書は、これを書評した岩井自身も容認しているように、精神作用のダイナミズムを通して、「内における『秩序』と外における『混沌』という対立概念間の弁証法的相互規定の過程の中に、人間社会の『秩序』確立の基本原理を見出そうとする」⁸⁵⁾ものと言えよう。岩井は、「混沌」へ解体しようとするエントロピーの増大に抗して、文化の秩序を保持するため、絶えず「混沌」に働きかけていかねばならないよう余儀なくする、秩序形成のための必要な宇宙力を認めている。こうした発想は、たとえば、西田幾多郎

の言う質料による「逆限定」を連想させるし、より古くは、ヘラクレイトスの箴言にあるように、病の存在はかえって健康をより善きものにし、疲労は安息をより楽しいものにするといった「努力」に潜む逆説に似ている。岩井は、本書の長所を、社会秩序の形成を静態的ではなく、動態的弁証法的に見ることを可能にする余地が残されているところに見出している。

とすれば実践の世界は、理念(イデー)の世界から「理想」(イデアール)の世界へ移ってこなければならない。客観的な意味の世界から、当為の世界へ移ってこなければならない。このとき「目的」概念が必要となるが、そのことは同時に「手段」概念を引き入れることを意味する。上述の図を用いれば、中心 Mitte は、項における手段・媒介 Mittel へ下降せねばならない⁸⁶⁾。目的を実現する手立てを熟考するのは「知慮」であるが、個別者の把握にも関わる。吉沢理論においては、価値は目的-手段系列から離れて一般化され、意味の世界において、全体と部分の包摂関係に立つヒエラルキーが記述されているにすぎない。全体と部分との意味的關係は、感性界にあっては一義的封鎖的であるのに対し、概念的思惟界においては自由であるとされたが、後者を語る時、全体と部分の關係に代わって、目的と手段との解放的な実践的關係がこっそり導入されているのである。いやしくも実践世界に入るなら、そのヒエラルキーは、規範性を持った特殊な目的原理に嚮導されるのでなければならない。いったい経済的生活の意義とは何であるかという呼びかけに応うるに、目的原理を欠けば秩序形成は意味を失ってしまう。この目的への志向性は、実は人間本性の傾向性に担われているのである。

吉沢自身、貨幣が「人間の他の特性にも還元しえぬ人間の本性であり、同時に人間間の本性」を構成すると述べる時、貨幣は、本性に担われた「創発的特性」を有する「精神の原型」一般にあずかって、経済領域に特有の「しるし」を刻印するものと捉えることが可能となる。「精神の原型」は、己を限定してさまざまな領域を生み出し、混沌と戦いながらこれを秩序づけていくダイナミックな働きそのものである。とすれば、たとえば「法」にもそれを領域づける固有のア・プリオリが考えられるはずであり、「法」とは異な

る、つまり「法」には還元されない特殊なア・プリオリに限定されてはじめて、「経済」という特殊の領域が確保されるであろう。そのうえで、貨幣というア・プリオリな「集合表象」が、どのように「本性」に着床しつつまた離れているか、このことが問われるべきではなかろうか。言語・法・貨幣に共通する「精神の原型」から、己を限定して特殊な領域を生み出して統一する固有のア・プリオリを、全体と部分の関係にではなく、「人間の社会的本性」に関連させて性格づけることが肝要となるように思われる。

「関係」という範疇的な「である」存在は、いわば各存在者領域を横断する共通の形式であるが、たとえば、経済、法といった各領域的な「がある」存在の中での述語として、改めて特殊な規定を受けねばならない。これは、古いスコラ学的な議論の想起でしかないかもしれないが、どの程度説得的なものになるであろうか。言語・法・貨幣に通底する類比を求めることは、岩井と吉沢にとっても共通の関心事であった。ア・プリオリな観念枠を外的実在にはめ込むことで後者を賦活させる吉沢「精神の原型」理論と、内に空虚を抱え、また支える土台のない自己循環の「社会的実体論」を唱える岩井理論に対して、「人間の社会的本性」の研究はどのような態度をとりうるか、アリストテレスの思考枠組みと連関させながら次回に論じることにしよう。

註

- 1) J. メスナー『自然法』水波朗・栗城壽夫・野尻武敏訳、創文社、1995年、158頁。
- 2) この4区分の名称は、一応、カール・ポランニーがその著作『人間の経済I』玉野井芳郎・栗本慎一郎訳、岩波書店、1981年、198-206頁で述べたところに従っている。なお、事典については「貨幣」に関する基本的機能の解説記述として、吉沢英成が担当執筆した平凡社『世界大百科事典』2007年、二瓶敏が担当執筆した小学館『万有百科大事典』1975年をそれぞれ参考にした。
- 3) 『貨幣の哲学』については、邦訳として『ジンメル全集』にも第1・2巻に分けて、「分析篇」と「総合篇」とがあるが、本稿は、G. ジンメル『貨幣の哲学』（新訳版）、居安正訳、白水社、1999年を用いた。難解な本書の理解のためには、恒藤恭『ジンメルの経済哲学』改造選書、1947年、岩崎信彦・廳茂編『「貨幣の哲学」という作品——ジンメルの価値世界』世界思想社、2006年を参観して便宜を得た。
- 4) *ἀσία* という言葉の使用は、Boniz の Lexikon で当たると、『ニコマコス倫理学』で

は、1115b19, 1119a20, B6, 1122a26, b29, 1123a18, 1131a24-29, 1136b16, 1158b27, 1159a35, 1160b33・6, 1161a22, 1164a22-b21, 『政治学』では、1272a38, 1278a20, 1282b27, 1287a13, 1301b30, 1302a8, 1317b4, 1329a17 で現れているが、その意味にさほどの多義性はない。

- 5) ジンメル前掲訳書, 23-24 頁, 70 頁。また「犠牲」については 49 頁。このことは、困難な恋愛や、危険なアルプス登攀のことを想起すれば分かるように、多くの労苦と献身を要求するがゆえに、事の成就是魅力を集め注目されるべき価値を帯びるのである。ただし、距離が価値の前提であり、その克服のために払う努力に価値が成立するというならば、客体の完全な享樂、すなわち主客一体の融合状態にあっては、価値はもはや成立しないことになる。これは価値概念が内包する自己矛盾である。価値は矛盾の中に生きるのである。
- 6) 前掲訳書, 40 頁。「接近」について。「距離と接近との同時的な成長へのこの内的な発展は、明らかにまた歴史的な分化過程としても現れる。文化は関心圏の拡大を引き起こす。すなわち関心の対象が見い出される周辺が中心から、すなわち自我からますますはるかに離されるということである」(前掲訳書, 36-37 頁)。『貨幣の哲学』の出発点に置かれた距離と接近という言葉を基軸に、ジンメルのエッセイ「橋と扉」(『ジンメル著作集 12』所収, 酒田健一・熊沢義宣・杉野正・居安正訳, 白水社, 1994 年, 35-42 頁) を読み解こうとする大杉至の論文「ジンメルにおける貨幣の発生とその効果——『距離』の視点から」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』平成 14 年が興味深い。ジンメルによれば「橋と扉とでは力点のおかれる場所が対照的であるという印象を受けるが、この力点の相違に注目すれば、橋は、人間がたんなる自然的存在の切断された状態をどのようなかたちで統一するかを、扉は、人間がこの自然的存在の一様で連続的な統一をどのようなかたちで切断するかを示している」(前掲訳書 41 頁)。大杉論文は、橋の比喩をもって貨幣の無性格の道具性を説明する。貨幣をもってひとは購入しようとするすべての対象に橋を架けうるが、譲渡されても人格から完全に分離できる。「売春における貨幣の役割とは、享受する対象に橋を架け、享受の後で瞬間的にその橋を壊してしまう」ものと言える。反対に、貨幣交換による対象との接近を前提しないことは、扉を閉め切った状態であって、それは「金銭蓄蔵」を比喩するものである。同論文 54-55 頁を参照。

ちなみに、こうした「橋」の解釈は、「生の哲学」の相互作用内で行われたものであるが、後に「橋」に統一作用的な存在論的意味を付与したのが、哲学者 M. ハイデッガーの“*Vorträge und Aufsätze*” (5. Auflage, 1985) 所収の論文 ‘*Bauern Wohnen Denken*’ (S. 139-156) であったと見ることができないであろうか。橋は、今まで川の流れて分離していた兩岸を引き寄せ、新しい世界を打ち立てる。このとき「橋」はたんに交通の媒介ではなく、わが国に言う「橋立」(階)のように天地をつなぐ象徴的意味を担う。兩岸は依然として平面に「存在」している。しかし架橋に

よって、新しい世界が立ち上がって「成立」したのである。貨幣もまた、異なる商品間を媒介する交換機能を営むにとどまらず、その観念は、人間関係を精神関係へと立ち上げるのである。

- 7) ジンメル前掲訳書, 66–67 頁。
- 8) 前掲訳書, 309–310 頁。
- 9) 前掲訳書, 54 頁。
- 10) 前掲訳書, 123 頁, 128 頁。
- 11) 前掲訳書, 106 頁。
- 12) 前掲訳書, 110 頁。
- 13) 前掲訳書, 131 頁。
- 14) 前掲訳書, 136 頁。
- 15) 前掲訳書, 144 頁, 153 頁。その一つの理由は、「その他の利用の断念は貨幣としての金属を、他のまったく利用できない素材と同じ価値段階へ低下させるどころか、さらに可能でありながら実現されなかった利用は、金属が貨幣として持つ価値へとときわめて顕著に寄与するという事にある（同訳書 141 頁）。第二の理由は、政府による貨幣の乱発によって価値・価格の不均等な変動が起こることである。相場が過度の活況を呈し投機的な要素が優位を占めるが、価格の高騰した需要品を調達するために、再び貨幣の発行を招く悪循環が現れるのも、「増加に制限のある実体との貨幣の硬い結合が存在しなくなる」（同訳書 147 頁）からである。
- 16) 前掲訳書, 165 頁。
- 17) 前掲訳書, 167 頁。
- 18) 前掲訳書, 169 頁。
- 19) 前掲訳書, 171 頁。
- 20) 前掲訳書, 172 頁。
- 21) 前掲訳書, 182 頁。
- 22) 前掲訳書, 189 頁。
- 23) 前掲訳書, 192 頁。
- 24) 前掲訳書, 193 頁。また、個々の現象を一つ一つ比較して共通のものを見出そうとする地道な作業に比べると、自然科学が発見した「自然法則」はそれ自体が大いなる「認識の圧縮」である。オーストリアの物理学者 E. マッハは、その哲学的著作において、科学の目標は、因果関係を現象間の関数関係に置き換え、「思考経済の原理」に従って縮約的に述べることにあると説いた。哲学的人間学を代表するドイツの A. ゲーレンが「負担免除」を、言語や技術や社会制度等を含む文化全般の発展を導く思想として説いたことも軌を一にするであろう。実際「経済」という言葉には、小さな力の投入で大きな成果や満足を得るという意味がある。貨幣の機能は、まさにその典型であると言える。

- 25) 前掲訳書, 195 頁。
- 26) 前掲訳書, 197 頁。
- 27) 前掲訳書, 204 頁, 209 頁。
- 28) 前掲訳書, 211 頁。
- 29) 前掲訳書, 212 頁。
- 30) 前掲訳書, 235 頁。
- 31) 前掲訳書, 237 頁。「ところが、競争が激しくなり、分業が発達するにおよび、生活目的の到達が次第に困難となるや、そのための完備した手段の準備がやはり必要となる。むしろ今日の文化人の大部分は、その生涯を通じて技術への関心にとらえられ続けている。彼らは、究極目的の実現を支える条件のみに注意と努力を向けるため、真実の目標は彼らの意識から消え失せるばかりか、彼らの否定するところとなり、意識はまったく手段の実現に先鋭化するばかりである」(同訳書 237-238 頁)。
- 32) 前掲訳書, 238-239 頁, 197 頁。
- 33) 古代ギリシアの経済について, 前掲訳書, 239-242 頁。
- 34) 前掲訳書, 240-241 頁。
- 35) 前掲訳書, 241 頁。
- 36) 前掲訳書, 244-245 頁。
- 37) 岩井克人『貨幣論』ちくま学芸文庫, 2012 年, 87-97 頁, 97-102 頁。
- ① マルクス『経済学批判』武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦訳, 岩波文庫, 1956 年, 1 エレのリンネル=2 ポンドのコーヒー, 1 エレのリンネル=8 ポンドのパン等……の等式において、この等式が転倒されることで、リンネルがすべての商品の一般等価物になる(同訳書 48-53 頁)。この特殊な商品種が貨幣商品として機能するや、亜麻布 20 エレ=金 2 オンス(鑄貨名にすれば=2 ポンド)となる。『資本論』(一), 向坂逸郎訳, 岩波文庫, 1969 年, 127-129 頁参照。
- ② アリストテレスは貨幣法制説に入れられているが、正しいであろうか。彼にとって、貨幣は、異なる財を交換するための単一の価値尺度(メソーン)となる機能に意味がある。この価値尺度は、「申し合わせ」*κατὰ συνθήκην* あるいは「協定」*ἐξ ὑποθέσεως* に基づくことから、自然的でなく、人為的(ノモス)であると言われ、ノミモス(貨幣)の名称はこれに由来するため、そのように理解されるのであろう。しかし、このことは貨幣が法定されることを直ちに意味しない。それは、「自然的」が、正しい価値が一義的に決まることを指す言葉であるのに対し、「人為的」というのは、正しい価格が一義的に決まらないので、一応慣行に従って決めておかれた仕来りといったほどの意味である。ノモスは、*νομίζειν* 「一般にそう思われている」に由来している。慣行と規約の両義をこめる英語の convention に近いであろうか。
- 38) 前掲書, 106 頁。

- 39) 前掲書, 103–105 頁。
- 40) 前掲書, 200–201 頁。
- 41) 前掲書, 214 頁。
- 42) 前掲書, 197 頁。
- 43) 前掲書, 213–214 頁。
- 44) 前掲書, 157 頁。
- 45) 前掲書, 216–218 頁, 207 頁。
- 46) 鈴木敏紀「貨幣の機能と信用：岩井克人『貨幣論』批判」『上越教育大学研究紀要』1996 年, No. 16, 213 頁。
- 47) 岩井克人『資本主義から市民主義へ』ちくま学芸文庫, 2014 年, 236 頁。
- 48) 前掲書, 237–238 頁。
- 49) 前掲書, 238–239 頁。ここでは, 精神的存在が「力」を持つことを「実体性」と称しているようである。価値上の正当性と事実上の実効性との区別が意識されていない。かつてドイツの国家学者 G. イェリネックが, 事実的反復行為が規範の妥当を生み出すという「事実の規範力」を唱えたが, 精神的存在の発揮する「力」は, 「規範の事実力」とでも言えようか。しかしこうした物言いは, 新カント主義の立場から存在と当為的方法的混同として批判された(ケルゼン)。それにも拘らず, 「規範の事実力」が, 何らかの「実体性」に担われていると主張したいのなら, 新カント主義の方法二元論とは別の哲学を援用する必要がある。
- 50) 前掲書, 249 頁。
- 51) 前掲書, 251 頁。
- 52) 前掲書, 259 頁。
- 53) 前掲書, 255 頁。
- 54) 前掲書, 123 頁。
- 55) 前掲書, 273 頁。
- 56) 前掲書, 275 頁。
- 57) 前掲書, 273 頁。
- 58) 吉沢英成『貨幣と象徴——経済社会の原型を求めて』日本経済新聞社, 1981 年, 1–2 頁。
- 59) 前掲書, 33 頁。分業を生む原理につき, アダム・スミス『国富論』水田洋監訳・杉山忠平訳, 岩波文庫, 2000 年参照。「これほど多くの利益を生みだすこの分業は, もともとは, それが生みだす全般的富裕を意図する人間の英知の結果ではない。それは, そのような広範な有用性を考慮していない人間本性のある性向, すなわち, ある物を他の物と取引し, 交換し, 交易する性向の, きわめて緩慢で漸次的ではあるが, 必然的な結果なのである」(同書 37 頁)。
- 60) 前掲書, 32 頁。

- 61) 前掲書, 42–43 頁。ポランニー自身『経済の文明史』の最後の箇所と同様の目標を宣言していたのだが。同訳書 294–295 頁参照。
- 62) マルセル・モース『贈与論』(新装版), 有地享訳, 勁草書房, 2008 年。「ハウは, 最初の受贈者, あるいは, ときによっては第三者を追及するばかりでなく, 更に, タオンガを単に引渡されたにすぎない一切の者を追及するのである。要するに, ハウはその古巣, 森や氏族の聖所やその所有者のもとに帰りたいがる」(同訳書 43 頁)。
- 63) 吉沢前掲書, 106 頁。
- 64) 前掲書, 84 頁。
- 65) 前掲書, 104 頁, 116 頁。
- 66) 本多謙三「貨幣の存在論——貨幣における先天的なるもの」『思想』大正 12 年, ならびに「貨幣における社会性と歴史性」『思想』大正 14 年。拙稿では, 著作公開ページ, PDF 版の『論文集 6』「経済・社会哲学・時評・書評・その他・日記」所収のものを参照した。
- 67) 本多前掲「貨幣の存在論」43 頁。ヒュームの思想を現象学的に解し, 貨幣の主たる機能を交換の一般的媒介手段に求める当今の通説に対し, 貨幣の存立をア・プリオリなもの「信任」(「現象学風に言えば, Urdoxa = 原信憑」)に基づけるとき, 貨幣はそれ自体が経済価値の理念であるから, 商取引の目的物とはならない。むしろ「それが現実的な経済現象一切を支配する原理を体現していることが projektiv に, 従って, hypothetisch に認め得る」ものとなる(同 50 頁)。また「貨幣における社会性と歴史性」でも, 「売手にあっても買手にあっても貨幣が表現すると考えられるのはそれら当事者の個人的な情意内容でなく, それらの当事者の情意内容から独立しているものであって, しかも尚それらをも包容するような情意内容であるはずである。……貨幣を通じて見出す『自己』は個人的ではなく, 適当な意味で『社会的』である(同 89–90 頁)。
- 68) 吉沢前掲書, 112 頁。
- 69) 前掲書, 112 頁。
- 70) 前掲書, 113 頁。
- 71) 前掲書, 115 頁。
- 72) 前掲書, 115–117 頁。
- 73) 前掲書, 117 頁。
- 74) 前掲書, 143 頁。
- 75) 前掲書, 117 頁。
- 76) 前掲書, 117–118 頁。
- 77) 前掲書, 131–132 頁。
- 78) 前掲書, 132 頁。
- 79) 前掲書, 132 頁。このジンメル批判の文脈は, マルクスによる価値形態から貨幣

形態へと展開する論証が、相互関係の契機から統一性へと転化することの「無理」を指摘することを論証するところにもつながっている。前者は横の関係であるのに対して、後者は縦の関係である。「価値」概念に内包された二契機は、一発展系列において相前後して現れる二項ではなく、並置されるものであって、転化・生成する関係にはない。したがって、マルクスの価値形態論は、貨幣の契機に対応するもともとア・プリオリな精神作用の統一性を、「生成せしめようとしたがゆえに、失敗に終わること必定であった」ことになる（同書 140-141 頁）。

- 80) 前掲書, 132 頁。
- 81) ジンメル前掲書, 48 頁。
- 82) 吉沢前掲書, 131 頁。
- 83) E. フッサール『論理学研究 3』立松弘孝・松井良和訳, みすず書房, 1999 年。フッサールは、「部分」を、全体に対して相対的に独立的か非独立的かに応じて、「断片」Stück と「契機」Moment の両義に分けている（同訳書 55 頁）。断片に依存し分離できない「関係」は、抽象によって形成されるもので、後者に属する。断片が全く離接的な場合は、全体をなさず別々である。同訳書の第 2 巻第 2 章第 17 節を参照。
- 84) E. フッサール『論理学研究 4』立松弘孝訳, みすず書房, 2002 年。第 2 巻第 6 章第 45 節以下（同訳書 166 頁以下）参照。「感性的ないし実在的対象は可能な直観の最低段階の対象であり、範疇的ないし理念的対象は高次の対象であると性格づけうる」（同訳書 170 頁）。「A と B が隣接している」という表象における「と」は、「A」でも「B」でも、またそれらを部分として含む「全体」G でもなく、「関係の知覚」において総合作用を営む。範疇的直観においてはじめて、ある一つの分枝が主要分枝 Hauptglied（訳者はこれを「中心項」と補足した）として特に重視されるとき、同時にそれ以外の分枝相互の相関関係が統一される。つまり「全体 G の直観のうちに与えられる A と B という二つの内容の感性的な隣接関係を、『A は B と隣接している』という総合形式によって統握し表現する」。ここに A と B の表象に基づけられて、「事態」と呼ばれる新たな「高次の対象」が生まれている。特に第 48 節および第 50 節を参照。

なお、吉沢理論を批判的に論じた大杉至は、その論文において、吉沢の「全体」と「部分」の概念関係について、本人自身も言及する構造主義言語学者ヤコブソンの影響を見ているが、ヤコブソンの「言語における部分と全体」（『選集 2 —— 言語と言語科学』服部四郎編、大修館書店、1978 年所収）は 6 頁ほどのもので、ここに詳しい分析を見出せない。ただし、ヤコブソンはこの小論文の冒頭で、フッサールの「純粹文法学」の構想を賞賛しているところを見ると、吉沢理論の形成は、フッサールの影響が、それも本多謙三との関係を通じて、現れたものと見られる。しかし、大杉が、全体と部分の関係を「言語世界」において捉えていること

は、吉沢も貨幣と言語とのアナロジーに注目しているので、肯綮に中る。

大杉は、声帯から発せられる個々の単語は部分であり、それらすべての要素の集合が全体であるとしたうえで、咳払いが日本語という全体を構成しないが、全体の有する流動的・解放的側面である「中心」によって、「これまでに存在しなかったさまざまな音の組み合わせが新しい部分（新語）として日本語の中に組み込まれていくことを可能にする」と述べている。この解決方法は説得的である。「現代貨幣論とその批判——吉沢理論の意味」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』平成11年、55頁参照。この立場であれば、上述の「高次の対象」は、AとBの表象を基礎にその上に作り上げられた複合体というよりも、むしろわれわれに直接与えられた第一の対象であって、かえってAとBの表象の方が、この上に二次的に作為されたものとなる。文章の意味(Sinn)の理解は、それを構成する単語の語義(Bedeutung)に先立つし、音楽のメロディーの方が、個々の単音に先立つようなものである。

- 85) 岩井克人『ヴェニス商人の資本論』ちくま学芸文庫、1992年、301頁。
- 86) 山内得立『体系と展望』弘文堂書房、1942年、182頁。山内は、西田幾多郎、フッサールに師事し、現象学の導入に努め、古代ギリシア哲学やスコラ哲学にも精通した碩学である。類縁語の関係を掘り下げること、新しい展望を開くのに優れているが、‘Die MitteからDas Mittelへ’と題する所収本篇(同書165-189頁)もそうした趣がある。

